



減税で 日本は幸せになる!?

日本よ今...

闘論! 倒論! 討論!

#898

日本よ、今、闘論! 倒論! 討論! 2025第898回

R7/2/27

減税で日本は幸せになる!?

パネリスト:

会田卓司 (クレディ・アグリコル証券 チーフエコノミスト)

鈴木傾城 (作家・アルファブロガー)

田中秀臣 (上武大学教授)

長尾たかし (自由民主党参議院比例区第九十七支部長・元衆議院議員)

藤和彦 (経済産業研究所コンサルティング・フェロー)

松田学 (松田政策研究所代表・元衆議院議員)

司会: 水島総

水島「皆さん、こんばんは」

一同「(礼)」

水島「闘論! 倒論! 討論! 2025第898回目の討論となります。今日は大分、雰囲気が変わって来たというか、色んな政党も減税を言わないと拙いぞという感じで、どいつも、こいつもって言うか今頃になってという気は正直、あるんですけども、減税を言い出しているというのは大変、結構なことだと思うんですけど、ただ、色んな減税論もあります。今回は三党合意の維新まで加わった合意で予算は通してこうという流れがありますけれども、もう一つはそれと同時に世界が色んな形で変わろうとしている。トランプの相互関税とか色んな形で、これからどうなるんだろう。

アメリカのFRBは、金利を下げるような形になっていくっていう状態とか。これからの先行きを見て、我々の国がどうなるかということで、今日は減税というものを、正直言うと進めたい、進めるべきだと、私は個人的に思っています、勿論、違ってもいいんですけども、この話をして、どういう形で、日本の減税論というのが今、あるのか、それぞれ皆さんのご意見を聞いていこうということでもあります。

では、早速、ご出席の皆様をご紹介していきたいと思います。まず松田政策研究所代表、元衆議院議員の松田学さんです。宜しくお願いします」

松田「宜しくお願いします」

水島「経済産業研究所、コンサルティング・フェロー、藤和彦さんです。宜しくお願いします」

藤「はい。宜しくお願いします」

水島「上武大学教授の田中秀臣さんです。宜しくお願いします」

田中「宜しくお願いします」

水島「自由民主党参議院比例区第九十七支部長、元衆議院議員の長尾たかしさんです。宜しくお願いします」

長尾「はい。宜しくお願いします」

水島「作家でアルファブロガー、鈴木傾城さんです。宜しくお願いします」

鈴木「宜しくお願いします」

水島「そしてクレディ・アグリコル証券、チーフエコノミストの会田卓司さんです。宜しくお願いします」

会田「お願いします」

水島「はい。今日はこのメンバーでお送り致します。減税論、まあ、今の政治で言うと、流れが少し変わって来たのは、選挙前に手取りを増やすっていう国民民主党のあれがウケて結構、支持が集まったところから減税が国民の注目になっているんだなあ、或いは経済状態が良くないんだなあとか色んなものが出て来て、今、減税論が盛んになってきました。色んな意味から、ただ、私が見る分には財務省はこれをやると、何処かでちょろっと増税するというかですね…」

藤「ああ、それはそうですね」

水島「こういう感じがあるので騙されちゃいけないという感じが随分、色んな人から聞きます。この問題も本当の減税って今、何が必要なのかということを知りたいと思いますので、まず減税論を中心にご自身の立場をお話し戴いてから、皆さんとの議論に入りたいと思います。まず、松田さんからお願いします」

松田「はい。一番、冒頭の発言者になってしまいましたね」

水島「はい」

一同「(笑)」

松田「いやいや、いや(苦笑)私は元々、今、解体論の叫ばれている財務省におったものですからね」

一同「(苦笑)」

松田「私が勤めていた役所の前で、連日のようにデモが行われているということですね」

水島「ああ、そうみたいですね」

松田「そうみたいですね。財務省解体の気持ちは本当によく解りますね。今、この物価が上がっていて、この1月は米の値段が前年比70%あがっちゃうとかですねえ」

水島「そうなんですね」

松田「そういう生活苦の中で税収が来年度予算は8.8兆円、増えるんですがね、それなの

に、それをどっちに使っているかっていうと、国民に還元せずに国債の発行額を減らす方に使っていて…」

水島「そうですね」

松田「そして国債発行額は、17年ぶりに30兆円を切って28兆円に抑えたということ、財務省は胸を張って言っている」と

水島「うん」

松田「一体、どっちを向いているんだということで、これは、所謂、一揆が起こっているなという感じが非常にしますね」

水島「はい」

松田「ただ解体と叫ぶ気持ちは解るんですが、昔、私が大蔵省と呼ばれていた時代に大蔵省解体っていうことが凄く言われて、当時のことを振り返りますと、あれは、要するに、アメリカの金融資本が日本国民の資産を自分達でマネージしようという彼らの国家戦略の下に当時の大蔵省が護送船団やっている、けしからんと。何とかシャブシャブで酷く腐敗していると言って、世論を煽って財政金融分離をやって名前まで財務省に替えた。伝統ある日本の唯一の大和言葉の官省名をですね、えー…」

水島「大蔵省っていうのは、いい名前でしたよね」

松田「ええ、いい名前だったですね。大蔵というね」

水島「大蔵卿とかね」

松田「雄略天皇以来の名前を、アメリカの財務省の支店の様な名前に替えてですね」

水島「はい」

松田「我々は、あの時、大蔵省も普通の役所の一つ、すみません、経産省の方（苦笑）一同（苦笑）」

松田「普通の役所の一つになったんだあとか言っていたことがありましたけども、でも、あの時に大蔵省を解体して、その四半世紀、日本経済が良くなったかと言うと、失われた30年の象徴みたいな風に、私は思っていますね」

水島「うん」

松田「アメリカによる経済植民地化だと、私は当時、言っていたんですが、まあ、それは、ずっと進展して賃金が上がらない経済になってしまったと。だから、問題の本質は、やっぱり、まあ、プロパガンダもあって、ちょっと、ずれてしまっていたような気がしています、今回もそうならないように、本当の意味での財務省解体の意図するところを実現するようにしていかなければいけないという風に思っています」

水島「うん」

松田「その上で、私も役人をやっていましたが、役人というのは法律を守る存在ですから、まず、法律が良くないですね」

水島「うん」

松田「財政法4条という法律が赤字国債発行を禁止していますので、そうなりますとね、今の状態は殆ど国債が赤字国債ですから、とにかく赤字国債を減らすというのが自分達の第一の目的だという風に役所自体がそうになってしまうということがあるので…」

水島「はい」

松田「今、大蔵省を解体して、例えば内閣府予算局みたいなのを創って、やっぱり、今、主計局に400人ぐらい居るんですかね。それぐらいの人達が予算編成を徹夜でやっていますが、まあ、誰かやらなきゃいけないんで。そうすると、その人が役人だとすると法律を守らなきゃいけないとなると、やっぱり今の法律の下では同じことが繰り返されるだけではないかという気がしますが…」

水島「うん」

松田「この法律は、誰が改正するかと言うと、政治家の仕事、立法府の仕事なので、立法府が、何故こんなに長い間、財政4条を見直して来なかったのかという風な責任もあるような気がして、私は、そういった意味で既存の政党を解体と言った方がいいんじゃないかという風に思ったりしてしましてね（苦笑）。安倍元総理は、財政4条の改正に言及されたという話もありますけれども、まず、こここのところが一つあるなと思います。

それから、もう一つは、あとでも触れるかもしれませんが、日本はずうっと、対外純資産残高世界一を続けている国なので、世界で一番、アメリカに投資の多い国になっていますが、海外に投資するのもいいんですけども、それを国債増発して吸収して減税だけじゃなくて国としてやっていない事が沢山あるので、積極財政、回していくということは何らおかしいことではないと」

水島「うん」

松田「私も、ずうっと、そういうことを言って来たんですが、ただ、その際のネックは、金利の問題があって、日銀は金利をどんどん上げ始め、去年から今年にかけて、もう3回も上げましたけども、いずれにしても金利が上がった時に1100兆円の国債残高に利払い費、1%あがったら毎年11兆円の利払い費が増えるじゃないかと。2%上がったら国に入っている消費税収と同じぐらいの利払い費増が増えてしまうじゃないかっていう議論があるんですが、私はその時、財務省はDS、ディープステイトではないかと、よく言われるんですが、トランプ大統領がディープステイトとして叩いているのは、一つは、CIAがあるんですが、究極的にはFRBを叩くという風に言われていて、私は中央銀行こそディープステイトではないかという風に思っています。

かつてコロナの時は100兆円の国債を増発しましたが、あの時は緊急事態だっというので日銀も無制限に国債を買いますとやったんですね。勿論、アベノミクスの時も国債を、バンバン買いまくって、今回は昨年7月の金融政策決定会合で国債の購入量を徐々に半分に減らしていくと。そして国債の日銀保有残高を2026年二、三月期ぐらいで7~8兆円ぐらい減らすんだという風にやって、国債購入を減らす方向になっているんですね。

これは政府がいくら積極財政をしようとしても、日銀が制約をかけてきてしまっているということで、これこそ民主主義で選ばれた人達でない人達が指導者の手足を縛るということをやっている訳ですから、まあ、あとで少し詳しく言うかもしれませんが、じゃあ、何故、日銀が国債の保有残高を減らしたいかと言うと、彼らの認識では今、資金が市場にじゃぶじゃぶ溢れていると」

水島「うん」

松田「資金が溢れている下では、金融政策が引き上げの時に中々引き難いんだと言うので、彼らの悲願なんですよ。つまり金融界に対するコントロール、権益を維持する為に縮小しているんじゃないかと受け取ることも出来る訳で、これぞ正にディープステイトと言うと日銀の人に怒られるかもしれませんが、しかし、問題の本質は、国債というものを、どういう風に捉えるのかというところにあるように思いますので、今日も時間があれば、松田プランというのは、それに最終的な答を出すと、私はいつも言って来たら、何とトランプ大統領が色んなアメリカ・ウォッチャーの話の話を聞いていると、まあ、ああいう、所謂、通貨発行権を中央銀行、FRBが独占するのは良くないなと。

アルゼンチンのミレー大統領はトランプ氏が当選して最初に会った人ですが、喜んで会っていました。ミレー大統領が中央銀行は無くさないけれども、でも政府が通貨発行するんだと言っているらしいんですね。しかもトランプさんは、このブロック・チェーンというのを使った新しいテクノリ・パタリアンの新しい通貨、まあ、ビットコインのことを言及

していますけども、その流れを見ると、政府はデジタル通貨を発行して、政府も通貨を発行すると。

だから、それがブロック・チェーンの上で色々な自由な、もっと通貨を自由化していいんだという考えを持っているのではないかという風になると、この番組でも私が時々提案してきた松田プランに極めて近いものを考えている可能性があるんじゃないかと。だから、世界は今、通貨の概念が大きく変わろうとしているところまで考えて、国債というものをネガティブに捉えるのをやめましょうと。こういうところを取っ払ってこそ、本当の減税になっていくという風に思います。取り敢えず、ここまでです（礼）」

水島「その中で一応、皆さんの為に確認ですけど、日銀は市中にお金がじゃぶじゃぶ溢れているという認識ですか」

松田「はい、つまり、どういうことかと言いますとね」

水島「そこ、大事なところなのでね」

松田「はい。要するに日銀のバランスシートです」

水島「はい」

松田「これは昨年7月末に国債の購入額を減らすと決めた時の数字ですけども、異次元の金融緩和で国債を485兆円、増やしたという訳ですね。この代わりに、これは国債を市場から買って、その代金を日銀当座預金に入れる訳です。この日銀当座預金っていうのは、銀行が日銀に持っている口座ですね。それで、この日銀当座預金の間で金融機関の銀行の間の資金のやり取りが行われている。要するに、これがインターバンクという銀行と銀行の資金取引で、だから短期金融市場みたいになっていて、ここが国債の代金を振り込んで膨らんでいるものですから、487兆円に膨らんじやったものですから、ジャブジャブにやっているのが日銀の認識ですね」

水島「うん」

松田「私の日銀の友人で幹部を務めていた連中は、みんな、これを問題視してまして、これがあるから金利を引き上げようとしても政策手段が無いんだと」

水島「うん」

松田「結局、難しいんだということを、彼らは言っているんですね」

水島「そこら辺は、この国債発行の問題と絡んで来て、ちょっと議論の余地ありですね（笑）」

松田「そうです。ここはね、もう少し、いくらでも考え方があると思うんですよ」

水島「そうだよね」

松田「だから、結果として、ちょっと先まで言っちゃいますと、今回、日銀が、もう利上げを決定しましたが、結局、マイナス金利もあつた時代から0.1にして0.25にして、今回、0.5%まで金利を上げた時に日銀当座預金、当座預金ですから本当は金利ゼロでいいんですがね。これを0.5%まで上げているんですね。何故、こんなことをやるんだと、私も日銀の人に、かなり突っ込んだんですが、いや、金融市場がジャブジャブで困っているんだとしか中々言わなかったんですが、白状したんですけども、要するに、今、インターバンクで取引が中々成立しないけれども、日銀の当座預金に預けると0.5%金利がつくと」

藤「うん」

水島「ああ」

松田「そこでインターバンクの間では0.5%のすれすれの低い金利で取引をして、そして、それを日銀当座預金に預けるということが起こると、市場金利がそこに近づくんだという説明書き（笑）。これ、普通は中々やっていないかもしれません（笑）」

水島「ねえ」

松田「これが本音らしくて」

水島「なるほどねえ」

松田「だから、いくらでも金融調節の手段が本当はあると、工夫しなきゃならないと思いますが、やっぱり、こちらの方にいっちゃったんですね」

水島「その中で、こういうことをやっていたんですね」

松田「ええ。はいはい、はい。ええ」

水島「はい。また、これは、お話して貰いたいと思います」

松田「はい。技術的な話ですみません」

水島「はい。では、藤さん、お願いします」

藤「はい。減税の効果っていうのは伝統的な経済学の発想ですから、冒頭、私は発言をしないで経済学的な観で聞いた上で、今日のお題は、これで幸せになれるかどうかという話なので、普通に経済学が想定しているピラミッド型社会であれば、減税して懐が豊かになれば、みんな、幸せになるって、ある意味では予定調和が働くんですけど、今の日本って多分、金融政策、財政政策が効かない人達が、4割とか5割も居る社会なので、その中にあっての幸せ、まあ、多分、英語で言えば、Well Being。日本では福祉っていう訳し方をしますが、経済学では、ちょっと亜流の部分ですけど、厚生経済学とか、そういう部分で、本当に懐が増えることによって果たして幸せになるかどうかについては、皆さんのお話を聞いた後で、また持論を述べたいと思いますから、取り敢えず、私は冒頭、これで収めておきます。以上です」

水島「なるほどね。はい、田中さん、お願いします」

田中「はい。今日はスタジオに来てから花粉症が発症しちゃって」

藤「うんうん」

田中「ひょっとしたら今日は、あまり発言出来る可能性が（苦笑）」

水島「確かにねえ、花粉ですよ」

田中「もうスタジオに花粉が凄く舞っていて…」

藤「飛んでますよねえ」

田中「もう声が変わって来ちゃっていますから」

水島「それも凄い…」

田中「申し訳ないですけど。それで減税ですけど、減税が政党でブームになっているっていうのは、僕の認識とは違って…」

水島「うん」

田中「それは支持者の人達には申し訳ないですけど、少数政党は確かに減税を言っていますけどね」

水島「うん」

田中「例えば自公維新で、事実上、私立高校の無償化と、何か本当にやるかどうか分かんないような社会保障の削減」

水島「そうだね」

田中「それで三党合意をつくりましたよね。三党合意って言うと、何かブラックなイメージしか僕には無いんですけど、それって言うのは事実上、私立高校の無償化っていうのは規模にすると最小で2千億円、最大でも6千億円ぐらいですか。人によってバラバラですけど、一応、そのぐらいの減税効果、減負担効果があるよなんていう風に言っているんですけど、これは、やっぱり長期的な財源の問題っていうのが絶対に出て来て、そこは曖昧ですけど、要するに増税するんでしょうね。今、まあ、維新は、さて置き、自公が去年か

らやって加速度的に増えていきますけど、ステルス増税ってあるじゃないですか」

水島「はい、はい」

田中「例えば、大阪大学の安田洋祐さん達が防衛税、森林環境税、その他諸々ですよね、それを含めると、大体、消費税換算すると、標準世帯で既に1.2%ぐらいの増税になっている訳ですよ」

水島「なるほどね」

田中「それに多分、喫緊の問題では無いと思う私立高校の無償化、それは先程、言ったようにマックス6千億ぐらいですか。まあ、再来年度からですか。再来年度からやるみたいなことを言っていて、それも将来的には今、言ったように財源問題とか、また言って来ますから、そうすると増税っていうのは、やはり長期的に出て来ると思うんですよね。で、更に高額医療費の引き上げ問題」

水島「うん」

田中「これも事実上、一部の人達、つまり、入院を複数回、延長するような人達が確か、4回以上になると、ちょっと負担を現状と同じようにすると言っていますけれども基本的なフレームは全然、変えていませんから、やはり、高額医療費の引き上げっていうのは、金額って言うよりも、国民の生命をリスクに直面させるという非常に最悪の政策の一個だと思うんですね」

水島「うん」

田中「そういうのを考えると、ステルス増税も既に高い中に、更にプラスの要因が将来的にのしかかって来て、今、言ったように高額医療費のスキームを、これねえ、基本的に、厚労省とか全く変えるつもりないので、マスコミだとね、何か修正がかかっているみたいなイメージ戦略でやっていますけど、基本的には全く同じですから。それを考えると将来的に可処分所得が低下するんじゃないかと、みんなが思う訳ですよ。そうすると、過去2年間、賃上げてやっていました」

水島「うん」

田中「定額減税もやったと。それにも拘らず、消費が全然、伸びていないですよ。その背景には将来的な増税、税負担というものが国民に強く意識されている訳ですよ」

水島「そうですね」

田中「その中で、まあ、ぶっちゃけ言って、私は昔から、言葉の正しい意味で国民民主党のアンチに近いんですけど、だけれども言っている政策は非常に正しい。減税政策を持ち出して来ているのは非常に正しいんですが、そういったものを事実上、維新がぶち壊した訳ですよ。維新側にも、国民民主党が乗ってくれないとかいう色んな理屈はありますけれども、それは政局の話なので勝手にやって貰いたいと思っていますが、国民に必要な減税政策はチャラになっちゃって」

水島「そうだよ」

田中「まあ、増税、増負担だけを意識するような政策が今のところ通っているということですよ」

水島「うん」

田中「やはり、これは日本の経済にとって、非常に拙い押し下げ要因になっちゃっている訳ですよ」

水島「うん」

田中「簡単に言うと、今、デフレ脱却四指標の内、表向きはGDPギャップが未だマイナスですよ。だけれども、もし、それが仮に解消されたとすると、補正予算を打っていますから。あと、賃上げのムーブメントが3年目で繋がりますからね。ひょっとしたら、GDP

ギャップがプラスちょっといくかもしれないし、でもゼロにしておく。だけれど本当の意味で、経済が安定化するには名目GDPに大体プラス4%とか5%ぐらい乗った方がいいですよ。今、名目GDPは600兆円ぐらいですよ。

そうすると30兆円ぐらいオーバーした名目GDPプラス30兆ぐらいが持続的にあった方が絶対に経済が生まれると思うんですよ。それは色んな、いい波及効果を齎すと思うんですが、今の石破政権はそういった政策フレームを全く執っていないと。

日銀については松田さんと若干、違うんですが、やはり、この利上げモードということは、やはりねえ、はっきり言って、利上げして景気が回復する訳がないですから。今のよ
うな状況で本格的に完全にデフレ脱却していないっていうのは、日銀も政府も一応、表向きは共通認識ですね」

水島「うん」

田中「そんなので利上げしてデフレ脱却、出来る訳がないじゃないですか。これは小学生でも解りますよね。そういったことをやっている中で、今の三党合意の結論、そして、別な三党の協議、先程の国民民主で出た年収の壁の引き上げ。これは、ご破算になっちゃいましたよね」

水島「うん」

田中「これは、もう予想できたことですよ。去年の補正予算の時に、国民代表代行の古川氏が席を立ったでしょ。まあ、松田さんには悪いですけど、僕は、財務省出身の政治家の人を全然、信用していなくて、あれで123万円が直ぐ決まった。速攻でね」

水島「うん」

田中「あの時、席なんか立たずに、もっと頑張るべきでしたね。そのお陰で維新との調整するタイミングの時間を自公に与えちゃった訳ですよ。公明党としては、まあ漁夫の利を得ようとした訳ですが、その話は置いておいて、自民党にとっては、維新との調整時間を与えちゃったので、僕は、もう今年になって自公維新でやると。隠れ犯人は、国民民主党の元財務官僚の今の代表代行であるという風に思っていますよ。

まあ、その話は若干、私の陰謀論的な話になっちゃうかもしれないので一応、置いておきますけど、今のところ政策的に出口がないので、ただ政府は、さっき言った補正予算で、今年の始めは多少盛り上げて行って、これでデフレ脱却四指標の条件が揃ったと思って、それで3年目に賃上げのムーブメントにもって行って、何か形だけ整えて参院選に突入するというのが彼らの脳内のシナリオだと思いますが、まあ、一方で政局の話でしかなくて、我々の国民生活は、今の石破政権と財務省の組み合わせっていうので、お先が非常に暗いなど、特に夏以降の展望が全く開けていないと」

水島「うん」

田中「そこで選挙は、自民党の思惑とは違って恐らくコケ負けすると思いますので、長尾さんには申し訳ないですが、そうなると、また政局になっちゃって、経済政策は二の次、三の次になる中で、国際情勢の問題を見ると、日本経済は本当に楽観できないなあっていう風に思います。以上です」

水島「そうですね。今、田中さんが政局的だとか陰謀論的って言ったけど、それは結構、リアルな話でね。国民民主のあのものが外されて維新の流れになったっていうこと自体は、はっきり言うと、自民党が致命的な選択をした可能性もあるっていうね。まあ、維新は今、兵庫県の問題とか県議の情報漏洩だというのがるのでボロボロになっているから、くつつきたいのは解るしね、連立になりたいのもよく解るんだけど、国民が唯一希望していた減税路線が閉ざされたっていうのは凄く閉塞感がありますよね」

田中「ありますよねえ。だから再来年の私立高校の無償化は、さっき言ったように数千億

円ぐらいの規模で、しかも、多分、増税と組み合わせて来ると思うんですよ。そうすると本当に減税路線っていうのは今、執られていないですよ。やるとしても給付金とか例えば、もし、岸田政権パート2みたいなものが出来ていて、また何か一時的な定額減税とかをやるかもしれないですけど、経済にとって一番、効果があるのは恒久的な減税じゃないですか。

恒久的な減税をやろうという政党が今、実行力を持っているところが無くなっちゃった訳ですよ。その国民民主党の今回、入れた三党の調整が失敗したと、昨日、決まりましたけど、それは去年の内に決まったんですよ、補正予算の。あれで席を立て、僕はねえ、あの古川さん、本当に計算づくで、やっていると思いますよ」

水島「なるほどね」

田中「だって、あれは絶対に立ちやいけないですね」

水島「うん」

田中「あそこで粘んなきゃ。どう考えても、時間を与えれば与える程、少数与党にとってはアドバンテージを齎しちゃうから」

水島「そうだよ」

田中「ええ」

水島「はい。中々鋭い指摘だと思います。では、長尾さん、お願いします」

長尾「はい。お題にあるように『減税で日本は幸せになる！？』というところですけど、まあ、減税だけでは駄目ですよ」

水島「まあ、それは当然ですけどね」

長尾「ええ。やはり経済成長と両輪だっていうところで、政治の現場では、やっぱり専門家の方々の色々な知恵とか知見を戴きながら、物事を決めていくっていう作業になる訳ですけど、私が経験していることは、多くの議員の皆さんが経験していることだと思っていと思うんですが、やはり、恒久財源、減税でもいいですけど、恒久財源っていう形になると、普通に僕らも含めて一般の方々には経済が成長していけば税収が上がるんだから、そういうシステムは、やっぱり恒久財源でいだろうと思うんですけど、財務省はそれを絶対に恒久財源とは言わない」

水島「うん」

長尾「絶対に言わないですね。平場でも言わないです。ええ。でも、財務省が言っている恒久財源っていうのは、制度の中でこれだけ戴きますというもののだけが恒久財源だと」

水島「うん、うん」

長尾「ここに大きな隔たりがあるんです」

水島「ああ」

長尾「ええ。ですから減税、増税、或いは経済成長、国債とかいうような部分に於いて、この共通項が、そのところで完全に分断されてしまっているんで話が進まない」

水島「ああ、なるほどね。そう言われると解るね」

長尾「そうなんですよ」

水島「あの財政法4条の問題も、そういう風に考えると、今の考え方がね」

長尾「そうです」

水島「なるほど」

長尾「ええ。それで役人は役人で自分達は何をやっちゃっているかっていうことを解っている人も居るかもしれないし、敢えてやっている人も居るかもしれないし、純粹に法律を守ってやっているという人も居れば、或いは、いや、そういうものだから、しょうがないという風に思っている人も居ますが、特に減税っていう形に辿り着くまでに、色々な手続

きの一步一步が本当に信じられないぐらい乗り越えられずに今日に来ていると」

水島「うん…」

長尾「私の様な減税というものを、ずっと一貫して外にも中にも訴えている仲間同士は、それでコンセンサスを得られる訳ですけども、そうではない人達というのは、本当に、骨の髄まで減税ではなく増税だということを本当に思っているんですね」

水島「うん」

長尾「最終的には数で物事が決まって来るので、現状では本当にいかんともし難いという状況ですよ。ええ」

水島「う～ん」

長尾「ですから、やっぱり官邸の住人のさばき方次第だと思っています」

水島「なるほどね」

長尾「それ程、あの官邸って、やっぱり権限と力を持っていますし、官邸の指示があれば、役人はその通りに動きますし、自民党は最近、左傾化しているって、よく言われますけど、私から言わせると、昔から構造は変わっていない。ええ」

水島「うん」

長尾「官邸の住人が保守っぽい事を、ちゃんと指示をしていけば、そういう風に見えて来るし、そうでない人がトップになれば、ああ、なるほど、そういう風に見えて来るというようなところで、とにかく僕は減税と経済成長は、やっぱり両輪で議論する。ところが、財務省は経済成長なんていうものは要らんとっているのか、お前と。ええ。こちら側が受け取らざるを得ないような議論なので、やはり安倍さんが、なるほど官邸周辺の人事に於いて財務省をほぼ締め出し状態で経済産業省周辺、或いは警察周辺で固めたっていうのは成程なあと思いますね。今、また元に戻っちゃいましたけど。ええ」

水島「なるほどね。はい。大事な指摘だと思います。はい、有難うございます。では鈴木さん、お願いします」

鈴木「はい。減税と言えば、今、もう巷で、巷って言うか社会の下の所で話題になっているのは、その年収の壁ですよ。これで今、103万円で非課税枠がとられているんですけども、この103万円って月に直せば8万5千ぐらいですよ。8万5千833円。で、これを123万円にしましょうっていう話は、じゃあ、8万5千円を10万2千円ぐらいにしましょう。本当に、みみっちい感じです。これはパートのオバさんがちょっと忙しいから今月は残業してとったら、もう直ぐに、この枠、超えてしまうぐらいでね」

水島「そうですね」

鈴木「本当に、みみっちい話ですよ。ところが、それが全然、決まらなないと。国民民主は178万円にしましょうよっていう話を出した時に、もう、それで決めちゃえばよかったのに、何かあれこれ文句を言ってですね、この今の政府案が160万円ぐらいですね。178万と168万って、そんなに大した違いは無いんですけど、だけど、それでも非課税枠を下げようとしている訳ですね」

水島「はい」

長尾「所得制限も850万円、かけているんですね」

鈴木「はい、そうです。世間から、これを見ると、国民民主の178万円で対して、自民党は123万円とか言っていたけど、結構、デカイ数字を出してくれたなと支持しますよね。じゃあ、自民党は、色々レベルを作って、じゃあ、160万円にしましょう。160万円と178万円を比べると、やはり178万円の方が凄いに決まっている訳ですよ」

水島「それはね、18万円違うっていうね」

鈴木「うん、これだけ非課税が出るんだったら、もう国民民主の方がいいなっていう話に

なるんですけど、これは財務省が決めたのか、それとも、自民党内部で決めたのか知りませんが、160万円に所得制限をつけて200万円以上の人も、一応、非課税枠は取れるようにしたんですよ」

水島「うん」

鈴木「ということは、国民民主のものだと200万円以上の人は非課税枠が取れないから、じゃあ、うちら関係ないじゃんっていう話になっちゃうんですけど、これが政府案だと200万円以上も非課税枠をとれる訳だから、あっ、こっちの方が得だなというふうになる訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「だけでも、この非課税枠っていうのは、これ、面白いなあと思ったのは、罨だと思っんですけど、2年間しかやってくれないんですよ」

水島「え、そう」

鈴木「だから2年後になったら200万以上の人達には非課税枠が無い訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「そうすると国民民主が提案していた178万円と160万円だったら、178万円の方が得ですけども、160万円の方で妥協させてしまう。これって2年間の非課税枠を効かせた罨って言いますか、これが何か上手い事をやってるなあと思ったんですよ」

水島「うん」

鈴木「多分、上手い事をやっているんでしょうけど、ただ、こんな、みみっちい事で何か月も何か月もわあわあ言っている」

水島「うん、それだよ」

鈴木「これが日本の政治かと思えますよ」

水島「う〜ん」

鈴木「もっとガッカリしたのは、それこそ石破さんがアメリカでトランプ大統領と対談して1兆ドル、150兆円ですよ。150兆円ぐらいの投資をすると。もうバコオ〜ンっと金を出しますよね。そんな金があるなら、こっちに回せよみたいな話になるじゃないですか」

水島「うん。一般的な感じはそうですね」

鈴木「ええ。下の方には1万円、2万円、非課税にするかどうかっていう、みみっちい話をする、こっちの方では金をボンボン使って何だよっていう話ですよ。だから、こういったのを見ると、ちょっと自民党も何だかなっていう話になって来ますよね」

水島「うん」

鈴木「下の人は多分、そう思っていますよ。じゃあ、国民民主で頑張っ欲しいっていうのもあったりするんですけども、国民民主は国民民主で、まあ、そんなに政権を担える程の力は無いし、じゃあ、他はどうかって言うと、他も無いし」

水島「うん」

鈴木「自民党は駄目だし、他も駄目だと」

水島「うん」

鈴木「今、選挙をやったとしても、大体、投票率って半分ぐらいですよ」

水島「うん」

鈴木「ということは半分は政治を見捨てている訳ですよ。もう無関心ですよ。何をやって変わらないうって思っているので無関心。その政治に関わっている半分も大体自民党は過半数、割れましたけど、約過半数とすると、全体で見ると国民の25%ぐらいしか、自民党を支持していない感じですよ」

水島「うん」

鈴木「あとは、もう日本っていうのを諦めてしまっている」

水島「うん」

鈴木「まあ、そういう風に見えますね」

水島「はい」

鈴木「しかも、この減税ですけども、ここで減税しても、例えば年収の壁を引き上げたとしても、今度、その106万円以上になると社会保険料が今度、上がって来るから、もしかしたら手取りが同じになるかもしれない」

水島「うん」

鈴木「まあ、そういう例もある訳ですね。ということは、じゃあ、こっちの非課税枠で税金をちょっと安くしました。だけど、こっちの方で取りますよっていうふうになっちゃいますよね」

水島「うん」

鈴木「だから、そういうのもあったりするんで、結局、財務省とか今の政権は税金を取ることに関しては損していないんじゃないか。まあ、そういう意図を感じました」

水島「うん。そうですね」

鈴木「はい」

水島「その庶民感情の問題で言うと、私が感じているのは、今迄、ずっと自民党の空白の30年もあるけれども、少なくとも私は、その考えを持っていませんけど、財政を健全化して何とか国民の為になるような経済政策を執りたいとしていたんだというようなイメージがあったけど、今は恐らく殆どの国民から酷い政府だと。国民虐めの政府みたいなね」

鈴木「うん」

水島「このイメージが大分、前のね、未だ小泉さんが言った当時は未だ余裕があったのか分かんないけど、身を切る改革とかね、こう言われるとコロッと騙されて、そうだねえ、みんなも我慢しなきゃいけないとか、その感じは今、全く無いですからね。本当に悪代官と言うかね、特にねえ、これは意外と、皆さんもそう思っていると思うんだけど、米の値段が1.7倍ぐらいになっているっていうのはねえ、米は食べなくなっているから大丈夫だっていったって、やっぱり違いますよ。米食民族だからねえ。この恨みっていうのは本当に、目の前に行くとか解るから、それも1.2ぐらいならともかく1.7倍とか、下手したら2倍ぐらいのイメージが今、あるでしょ。

それから何か抛出するっていうけども、この問題で言うと、鈴木さんが今、庶民的なね、感情の問題で、みみっちい問題を言うと、米の問題一つでも、もう、それは吹っ飛びますよね、おっしゃるように。百何万かどっちかにするっていうねえ。もっと言えば、簡単に言うと消費税を下げてくれた方が、よっぽどいいとかね」

藤「もう、それですね」

水島「そういう風に、みんな、シンプルに考えるんでねえ。何か色々理屈はあるだろうけど、結局、増税じゃんという感じがあるので、鈴木さんは、庶民調査っていうかね、そういうことを凄くやっている方で、本当に、その辺の乖離が凄いなあと。だから、田中さんがさっき言ったように、選挙やったら本当にボロ負けするんじゃないかっていうね、恐ろしい感じがするけどね。それでどうするんだっていうことになるから。では会田さん、お願いします。はい」

会田「はい、日本は減税で幸せになると考えます。理由は減税が充分に出来る程、日本の財政状況は改善しているからです。逆に改善し過ぎているので、減税が必要であるというところまで至っていると思います」

水島「はい」

会田「私はエコノミストとしてのライフワークとして、ワニの口を潰すと。歳出と税収のワニの口がどんどん広がってしまっているのです、日本の財政は、危機にあるという議論を潰そうと、ここ数十年、やってきた訳ですが、その背景にはグローバルの財政のやり方として国債を発行したものは永遠に借り換えをしていくというのが、普通の財政のやり方ですので、予算の中に債務償還費ってというのが入っていないというのがあります」

水島「うん」

会田「そしてワニの口の議論で、もう一つ大きなことは、税収は、それ以上に、それ以外にも税外収入もあり社会保険基金の余剰もあるので、税収だけでは無いということです。そして、ずっと使っている正しいワニの口ってというのがこれでして」

水島「はい」

長尾「ああ、いいですねえ」

会田「上が国債償還費用を除いた歳出。そして下が税収だけではなくて税外収入、または社会保障基金の過不足等が入っているものです。ご覧戴くとワニってというのは存在しないと。ただ赤字ですけれども、日本経済はデフレで経済低迷していましたので、これぐらいの赤字というのは充分に必要なであるっていうグラフで、ワニは居ないという論調をずっと張って来ました」

水島「うん」

会田「近頃、もっと凄いことが起きて、これは25年度の政府予算を入れた数字ですけれども、この正しいワニの口をご覧戴くと閉じています」

藤「うん」

水島「おお」

会田「もうワニは居ないどころかワニの口は閉じてしまった。そして、これを25年度の政府予算は当然、控えめな税収を基に為されているので、実際は、もう完全に閉じている可能性が高いということです」

水島「うん」

会田「しかし今、現状ですと手取りは増えておらず、国民の生活は困窮している訳です」

水島「うん」

会田「そういう状況であれば、閉じてしまっはいけない訳です。ということは国民生活を安定させて経済成長を成し遂げる為には、過去と同じぐらい充分、開いているワニの口が無ければいけない訳ですから、その部分は減税で、しっかり国民に所得を回すということが今、正に求められていることではないかと思えます。こういう減税の議論、今回も、国民民主党の減税論がありましたけれども、やはりグローバルな財政の議論とは全く違う前提で議論が為されているっていうことです。

一つは先程申した通り、国債は将来の税収で返すんだというグローバルの財政のやり方では全く無いことを前提にしているのです、この1センチを超える国債を、どうやって将来の税収で返すんだって議論になってしまうと、減税なんか出来ませんねとなってしまう。これは間違った財政議論な訳です。

もう一つは、2010年当時、民主党政権が、とても厳しい財政緊縮のルールを閣議決定をしました」

水島「うん」

会田「全ての恒久的歳出、又は減税に恒久的な財源を求める。これは強烈な Pay As You Go という財政確保ルールです。しかしグローバルには社会保障等の法律に基づいた支出は財源を求めます。しかし予算で伸び縮みする裁量的歳出に関しては財源を求めずに裁量的

歳出と税収の比較というのは、その時の景気動向によって変わって来るとというのがグローバルな財政のやり方な訳です」

水島「うん」

会田「しかし今回、減税ですから、これは裁量的なものなので財源は要らない訳です」

水島「うん」

会田「そして景気と比較をすると財政は改善し過ぎている訳ですから、そのまま減税をやっても何もおかしくはないんですが、この2010年の閣議決定をしてしまった強烈なPay As You Go、財源確保ルールを自民党政権でも未だ引きずっていることによって、この7~8兆円の減税の穴を、どうやって他の財源で埋めるのかっていう議論になってしまって暗礁に乗り上げたということで、もっと日本の財政のやり方というのは、普通にグローバルのルールに基づけば、そんなに苦しむ必要も無いですし、日本は、減税でより幸せになることが出来るんじゃないかとは思いますが」

水島「そうですね」

長尾「今の話では野田財務大臣の時ですよ（笑）」

会田「確か野田さんか、その前の…」

長尾「野田財務大臣の時です。あれから急にTPPが出て来て消費税10%が、野田財務大臣の時に出て来て…」

藤「ああ、野田さんだろうなあ」

長尾「ええ。はいはい。野田さんが総理になって」

水島「まあ、立憲民主党はね、その路線は変わっていないですからね」

長尾「はい」

藤「変わっていないですねえ」

会田「財政の間違った判断っていうのは1995年に始まります。1995年当時の大蔵省、当時は自社さ連立政権だったと思いますけれども…」

藤「ああ、そうか、橋本政権か」(★注 宣言が出たのは村山内閣の時)

会田「財政は危機にあると宣言をしてしまった。これは。きっと97年4月の消費増税に向かう財政危機感を煽ろうとしたんでしょね。やってしまった」

水島「うん」

会田「そして、実際に今回の減税策も1995年から基礎控除は変わっていないっていうことは、95年に危機宣言してから、あまりにも煽った財政危機によって、基礎控除を引き上げられなくなっちゃった訳です。そこからステルス増税が始まった。そこから15年後にPay As You Goの強烈な緊縮をやってしまい、そこから今、また正に15年ですから、丁度、この失われた30年間は正に誤った財政運営によって齎されてしまい、そして、その誤った財政の考え方が未だに減税の議論に悪い影響を与えていると。もう少し日本の財政の運営の仕方というのは、グローバルに普通のやり方に変えるべきじゃないかと思えます」

水島「会田さんの言うことは凄くよく解るんだけど、そのグローバルな再生のやり方っていうね、でも今迄、やってきた日本の財政のやり方は違うやり方ですよ。独自と言うか自分で決めたやり方だけど、これはどうですか、一般論として政治家は今、自民党も立民も、みんな、その路線で来ている。お付き合いする皆さんは、今言った、所謂、会田さんのグローバルな財政の運営っていうものは、ある程度、理解している人は多いですか」

会田「このワニの口を使う方は居なくなりましたね」

水島「ああ〜」

会田「さすがに恥ずかしくて、もう使えなくなっているんだと」

水島「うん」

田中「財務省にあったワニのイラストも無いもんね」

会田「ええ。ワニのイラストも無くなりました」

一同「(笑)」

会田「ワニは死にました。ところがグラフ自体は載せているので、未だそこは変えて欲しいんですけども」

水島「なるほどねえ」

会田「この財政の考え方が当然、変えなきゃいけないんですが、当然、何らかの財政規律は必要な訳です」

水島「うん」

会田「その財政規律を、より景気や国民の生活を阻害しないような、やり方に替えていかなきゃいけないと。そうすると今、私が自民党の先生方を含めて提案しているのは、コア・プライマリー・バランスという考え方に替えたらいかがですかと。これは経常的な歳出は税収で賄うってところまでは認めましょう」

水島「うん」

会田「ただ歳出には、成長投資のような将来の便宜を齎すような支出もある訳ですから、これは別に税収の範囲内でやる必要は無いんじゃないですかと。ただ経常的歳出は、まあ、財務省が言うように税収の範囲内でやるとすると、その経常的歳出に対して税収と比較してコア・プライマリー・バランスという考え方に替えたらいかがですかと提案しています」

水島「なるほど」

会田「そして、実際、プライマリー・バランスを計算したものをご覧戴くと、下の方が、通常のプライマリー・バランスの考え方ですが、上の方はコア・プライマリー・バランスの考え方に替えたものです。ここでは最小限、建設国債で賄われている建設支出だけ除いています。そうすると、もう黒字になっちゃう訳です。黒字になってはいけない場面で黒字になっているので、この二つが今、減税が必要であるという私の考え方の後ろにある考え方になります」

水島「ああ、田中さん、どうぞ」

田中「そのコア・プライマリー・バランスっていうのは国際的には、オリヴィエ・ブランシャール (Olivier Jean Blanchard) が日本の今の財政の状況っていうのは恐らくコアで見ると黒字だと。だから財政問題っていうのは心配なくていいと。むしろ今の現状として、まあ、一昨年ぐらい言っていたのかな、日本は経済が弱いから、やはり財政と金融をちゃんとやった方がいいということ去年の前半ぐらいまでは言っていたと思うんですね。

会田さんは国際的な観点から、それを言う方なので、ちゃんとね、今回、正に言ってみれば、政府が税金を取り過ぎになっちゃっている訳ですよ」

会田「そういうことです」

田中「ええ。しかも急上昇で税金、取り過ぎなので、今のが会田さんも、皆さんもそうだと思いますが、日本経済は未だに安定的な成長を遂げていないので、その為に財政支出を拡大して、その黒字の増加を多少ね、別に今、一時的に赤字になったってコア・プライマリー・バランスは恐らく長期的にとれば、もう黒字の経路に乗りつつあると思うから、別に赤字になったって一時的には構わないという風に僕は思っています」

会田「はい。このコア・プライマリー・バランスの考え方をスティグリッツ (Joseph Eugene Stiglitz) 教授にどうですかって聞いたことがありました。そうしたら面白いこと

をおっしゃっていて、実はクリントン政権の頃、彼は経済のアドバイザーをやっていたので、このコア・プライマリー・バランスの考え方を政策にしようとしていたと」

水島「うん」

会田「ただ問題は、投資的支出を何処まで投資として考えるのかによって、あまりにも政治的な動きになってしまった」

水島「うん、そうだよね」

会田「これは建設国債で賄われた公的公共投資だけではなくて、教育も投資じゃないか、色んなもの、半導体の投資も投資じゃないかとなって收拾がつかなくなってしまって政策に出来なかった。しかし日本には建設国債というラベルが、もう貼ってあるものがあるんだから」

藤「(笑)」

会田「これは最低限、建設国債だけ除いても黒字になる訳です」

水島「なるほどね」

会田「他の半導体投資だとか教育予算を入れたら、もっと黒字になっちゃう訳ですが、それは、まあ、ちょっと言い過ぎなので最大限、建設国債というところが、日本は、もうラベルが貼ってあるんだから、どうですかって言ったら、だったら、やらない理由は無いですかとおっしゃっていました」

水島「いや、そう…」

長尾「財務省なんか、そのところは一番、隠したいでしょうね」

松田「要するに、この議論は財政運営をバランスシートでやらないことから来ているんですね。この議論は昔からあるんですけども、だから、私も衆議院議員だった時に予算編成の時からバランスシートでやれと。他の国はバランスシートでやって予算、作っている国は、もう資本的支出と経常的支出を分けて、それで、その考え方の下に今のおっしゃった建設国債っていうのは実物資産しか今、試算に入れていない訳ですが、今、ITも発達していますので無形資産も入れられるはずですよ。民間企業は無形資産もどんどん資産計上していますから。

その会計の発達ということ、財務省、財政当局は全く進歩していないと。昔の通りやっている。だから60年償還ルールで建物耐用年数が60年だというところで、ずう〜と昔のまま旧態依然としてやっているというところを変えて欲しいということは国会でも随分、議論したんですが、財務省がバランスシートでやるのは絶対に嫌だって、予算統制が中々し難くなるとか全然、訳の判らないことを言っていて、バランスシートで辻褃が合ったら、その債務は全然、おかしくないし、バランスシートで辻褃が合えばいいっていうのは民間企業もそうで、だから、それだったら、このプライマリー・バランスから、そこを外せる訳ですから、そういう財政源に転換しなければいけないというのが一つ。

それから、もう一つ、債務償還費の話が出たので、実は、私も債務償還費っていうのは、所謂、60年償還ルールに基づいてやっていて、国債は60年かけて税金で返すんだってやっているのは世界で日本だけということですね(苦笑)」

水島「そうですね」

松田「だから、毎年、国債発行残高の六十分の一ずつ債務償還費と言って、一般会計から国債整理基金とかに振り入れているんですが、しかし、実際は国債なんか全然、減ってなくて、返って増えていて、これは国債の残高を減らそうという為にやっているんですけども、現実には全然、減っていない。まず機能していない。それから六十分の一ずつを入れたって、この財源は結局、国債で調達している訳ですよ。だから、結局、国債を発行して国債を返しているということをやっているだけで、私が昔、財務省の現役だった時に

同期が国債の責任者だったので、お前、なんで、こんな下らないことをやっているんだって言ったら、彼らの理屈は何かと言いますとね、毎年度の一般会計予算の中で、債務償還費というものが、これだけ計上していると。

それでも国債に、これだけ依存しているということを国民に知らせて、いかに財政が大変な状況にあるかを国民に解って貰う為だって言うんだけど、誰も、そんなところ、予算書は見えていない、国民は見えていない訳です（笑）」

水島「そんな者は殆ど居ないよね」

松田「だから、ただの痩せ我慢じゃないかということですね」

水島「う～ん」

会田「実は自民党の中でも、この償還ルールについて初めて議論に乗った時がありました。私も少し知恵を出したんですけれども、防衛費を増額する時に、あまりにも財務省がワニの口って言うんだったらワニの口が閉じればいいんだろうと。そうであれば償還費を外して、16兆円ぐらいあるので償還費を外して、防衛費を倍増してもワニの口は閉じるよと」

水島「うん」

会田「財政改善するんだから、いいでしょと言ったところ財務省が慌てて、この償還ルールに関して、まあ、色々いうことになったんですが、そこで財務省が認めた事は、60年償還ルールというのは、あくまで公債政策に関する政府の節度ある姿勢を示す為に導入されたものであり、文字通りの減債、即ち国債発行残高の減少を目指すものではなかったことを確認と。先生方の前で、これを言ってしまった訳です」

松田「そういう話をしていますから」

水島「そういうことだよ。うん」

会田「ということは、元々減債なんかするつもりはなかったけれども、慣行で、あそこに償還費って置いておいてワニの口ってやっていましたっていうことが、ここでばれたのでワニのイラストは無くなった訳ですね」

水島「う～ん」

会田「ということは、この慣行を早くやめるべきだと思います」

水島「それとね、さっき、ちょっと田中さんから指摘があった国民民主党の減税論ね、それと、ちょっと違うっていう話の中で、さっき、していましたけど、そのところは今の論理とどの辺が違うんですか。彼らはMMTのことを言っているんですか」

会田「これはMMTとは全く関係ないです」

水島「関係ないですか。うん」

会田「はい。これとごっちゃになって」

水島「うん、そこをしっかりしなきゃいけない」

会田「国債を永遠に借り換えして来ると言うのと、MMTで普通の経済理論とは違うと言う人が居るんですが、全く関係がなくて、グローバルの普通の財政政策の運営の仕方です」

水島「うん。それで、さっき言った国民民主の減税論っていうのかな、そういう流れは、今、言ったグローバルな財政運営、財政のこれとは何か違うんですか」

会田「これと、まあ、彼らはどうやって減税幅がこれぐらいなのかっていうのはマクロのロジックではないと思うので、その辺の背景は判らないですけれども、今のところコア・プライマリー・バランスで見ても正しいワニの口で見ても取り過ぎであるという経済状況があり、そして国民生活はとても苦しい状況である。そして政府はデフレ脱却を宣言して日本がコストカット型から成長型経済に替わったっていう認識には未だ至っていない訳です」

水島「うん、していないですよね」

会田「で、そうすれば当然ながら、まずは減税をやって経済を支える、国民生活を支える局面にあるっていうのは正しい考え方だとは思いますが。まだ財政収支は黒字になってはいけない場面だとは思いますが」

田中「やはり国民民主は国民の生存権の確保っていうね、その財政規模の云々っていうんじゃないで、だから先程、1995年から、ずっと据え置かれていると。それを日本経済も、特に最近の名目GDPも拡大しているので、その経済、今迄の据え置いた分を一気に生存権の確保ということで取り戻そうと言うのでやっている訳ですよ。

規模的には、今の会田さんのコア・プライマリー・バランスの黒字がひよっとしたら一時的に赤字に戻るかもしれないけれども、結局は名目GDPのコントロールさえしっかりしていれば、経済が上がって行けば、またコア・プライマリー・バランスの黒字のトレンドが続くという風に、まあ、玉木さんなんかは事実上、X上で言っていますね。

ただ、僕は玉木さんが言うのは解るし、応援もしたいんだけど、やっぱり国民民主の他の人達は何となく緊縮財政派の雰囲気が多いか、或いは、自民党も他の政党も、みんな、そうですけど、経済政策に対する理解が乏しい中で昨日、決まっちゃいましたよね。玉木さんが代表に戻ってくる前に決まっちゃったので、もうね、ええ。これも中々ポイントですよ」

水島「いやあ、仕切っていたのは幹事長っていう噂も結構、あるんでね、今、それを知っているなら教えて貰いたいけど。今、国民民主の決定というのは、別に私は国民民主を応援している訳じゃないけど、でも、そういった流れを提案したっていうね、だから正直、国民も希望をもったんですよ。それがああいう形になってしまったっていうね。やっぱり失望と絶望じゃないけど、結構、心理的なものも大きいと思うね。

で、今、何故、それを聞いたかって言うと、そのグローバルな財政論理が、コケてしまう一つの欠陥があったのか政局的なものだけだったのかとかいうものを、じゃあ、これからどうするんだってなった時、そういうのが主流になってくれればいいけど、また、元へ戻っていくみたいだね、今、現実には維新と三党のは元に戻った形のイメージですよ」

田中「そうですね。あと、それで鈴木さんが先程、指摘していましたがね、年収の壁の公明党案っていうやつは2年間で終わりですよ」

鈴木「そうです」

田中「言ってみれば、去年、岸田さんがやった定額減税と同じですよ」

水島「ああ、そうだねえ、やったねえ」

田中「それが1年なのを2年やるだけで、だから恒久減税っていうのは、財務省的には、さっきの1995年の、或いは…最近では野田財務大臣の時ですか」

会田「ええ」

田中「野田財務大臣の時にやった恒久的な歳出には、恒久的な財源を設けようという縛りみたいな発想が付いているから、絶対に、恒久減税は認めないんですよ」

会田「うん」

田中「だから、そういう話になっちゃっているんで、まあ、まあ、それに政治家が乗っているっていうところが駄目でしょう」

水島「そう」

田中「はっきり言って」

水島「いや、そうなんだよ」

田中「だから政治家、官僚みたいになっちゃっていて、もう本当に官僚出身者が多いので、あもう、官僚の方が多いので言い辛い…全然、言い辛いんですけど…」

水島「(笑)」

田中「はっきり言って三世、四世とか、そういった人は政治家にすべきじゃないっていう議論があるけど、官僚出身者も政治家になっちゃ駄目で、みんな、うちの大学で僕のゼミに入って下さい」

水島「(笑)」

一同「(笑)」

田中「それぐらいの暇とかはあるでしょ。もうね、官僚の人は、なるべく政治家にならさない方がいいですよ。ともかく官僚の人達は国民に受けがいいことを言って、『しかし』って言って、そこのあとで、自分の出身官庁にいいことを言うんですよ。典型的には、今、財務省叩きがあるのでねえ、それを別な組織の批判に持って行くとか論点をずらすですよ。でも、僕は、あの財務省デモの背景がよく判らないので、あれを応援している訳じゃないですけど、だけれども、まあ、一発やってみたらいいんじゃないかって、10年以上前から、何故、財務省の前でデモをやる人が居ないのかなあってねえ…」

水島「いや、私達はやっていましたよ」

田中「ええ」

水島「何年も前に」

田中「ああ。もう、それは素晴らしいと思いますよ。気づかなくて、すみません」

水島「ただね、今、田中さんが言ったように、私達も色々聞いてみて自然発生的なところと、今のところ組織的じゃないんですよ」

田中「みたいですよ」

水島「うん」

田中「ええ」

水島「だから実は意識を持ってやっている人が居ますけれども、参加している人達は本当にヒデ目目に遭っているっていう感じで(失笑)、土曜日、日曜日に集まってやっているっていう状態なので、我々は、そういう違う意味でもね、抗議のデモをしなきゃいけない。だから、よく、あんな所で日曜日、土曜日、役人も居ないのに集まって声をあげてもしょうがないっていう言い方する人が居るけど、それは違うんでね。ある種の、そういう国民の声の表れなんでね、まあ、そういう意味で、我々のところにも色々そういうリーダーみたいな人達から連絡があったりするんですね。

ただ、さっき言ったように財務省という存在が、松田さんからも指摘があったようにね、色んな海外のあっちとも繋がっていることもあるし、FRBとかね、こういうものとの繋がりもあるし、影響も受けている訳ですから、ただ私は、ちょっと、そこを突っ込みたいのは、会田さんが言ったグローバルな財政論というのは今、普通に聞くと主流になれば、それで主流になって貰いたいって思うんだけど、減税っていうのをどうやりますか。建設国債の問題は、例えば建設国債って普通に素人が考えると、例えば積極財政的な問題でお金がどんどん回って、というような形のやり方に聞こえるんだけど、減税っていうと、消費税とかそういうことですか」

会田「これはマクロ的には何でもいい訳です」

水島「うん」

会田「家計にお金が回る力が弱いのであれば、その回す力をつけるっていうのが重要で、その回す力がどれぐらい強いのかっていうのが、どれぐらい財政を出すとか減税をするかという額を決める訳です。ここが、また、もう一つ財政の考え方が前に進まなきゃいけないことで、このプライマリー・バランスとか、例えばコア・プライマリー・バランスであっても、これは、あくまでミクロの会計の考え方です」

水島「うん。そうだね」

会田「ということは、本当の財政の役割というのは、マクロ経済の状況である民間の経済の状況に応じて、あるべき財政の考え方が違って来るっていうのが普通の考え方である訳です」

水島「うん」

会田「そう考えると、これも私のずっと持っている考えで、ネットの資金需要という考え方です」

水島「うん」

会田「上の方が企業の貯蓄率です。企業は借金をして投資をする主体なので、貯蓄率にするとプラスが貯蓄でマイナスが借入ですから、この企業の貯蓄率というのはマイナスでなければいけない」

水島「うん」

会田「だから日本の場合には、これがプラスになってしまって、企業はリストラ、コスト削減ばかりやって全然、投資や賃金を増やさない。これが日本の構造的デフレの原因な訳です」

水島「そうだよね」

会田「しかしプレイヤーは企業だけではないので、もう一人、政府がしっかり支出を増やしていれば当然、家計に所得が回る力が発生する訳です」

水島「うん」

会田「ということは、上が企業で下が赤字で財政であれば両方を足して、この灰色のネットの資金需要っていうのにしてあげると、企業と政府が合わせたお金を使う力、即ち家計に所得が回る力が判断出来るっていうのが私の長年の考え方です」

水島「なるほど」

会田「これをコントロールしてくれと」

水島「うん」

会田「今迄、通常の経済だとマイナスなので企業と政府の合わせた支出をする力がちゃんと存在をして家計に所得が回っていくので、当然、名目GDPやCPI、物価というのは普通に上がって行く普通の資本主義の世界になる。ただ95年の財政危機宣言以降、それ以上、財政は出せなくなってしまった。

一方で98年、金融危機以降、日本経済は本当に苦しくなったので、結果として企業貯蓄率がスカイロケットのように上にあがっていくのに、財政の拡大がついていけなくなった結果、ネットの資金需要がゼロ、死んだ訳です。そして2020年迄、ぴったりゼロで、これは財務省がとても優秀で、経済がどんな状況であれ、ネットの資金上、ぴったりゼロにする財政運営をやっていた訳です。そうしたら問題はぴったりゼロにするっていうことは、企業と政府の合わせた支出をする力がなくなってしまった訳なので…」

水島「そうだね」

会田「家計に所得が回らないっていうマクロの状態になっちゃう訳ですね。そうして、家計ですとか地方がどんどん疲弊して、中間層まで疲弊するっていう状況にまで至ってしまった。しかしコロナで一発逆転が起こって、どお〜んと財政を出したことによってネットの資金需要が拡大して、そして名目GDPが525兆円で、ずう〜と膨らまなかった名目GDPが今、ぐう〜んと610兆まで来て、結果として税収も増えて、先程のワニの口が閉じるという状況にまで至ってしまったっていうことです。

だから、問題は、ご覧戴くと、またネットの資金上、今、プラスになっています。財政、取り過ぎです。やはりグローバルに未だ景気が良くないので、当然、企業の投資っていう

のは充分、増えていない。賃金上昇も充分でない中で税収が上がりまくって財政の収支が改善し過ぎているので、また家計に所得を回す力が止まってしまっています」

水島「うん」

会田「これが昨年から日経平均株価も上がらなくなってしまうとか、又は、昨年のGDP成長率がほぼゼロ成長ですから、また、日本経済が膨らまなくなってしまった理由です。ということは、これを、またマイナスに戻さなきゃいけないので、当然、企業の支出を促すような形で財政を使うのが一番、効率的ですけれども足りないのであれば、どんな方法であっても、家計に所得を回す為に減税でも消費税でも何でもいいので、回さなきゃいけないという状況にあるんだろうと思います」

水島「一般論でよく言われる、消費減税とね、或いは、積極財政論、今、陥没だなんだとかね、もう耐用年数が来ているから、いくらでもインフラ整備をやることは、建設国債を沢山、使ってやることも出来ますよね。今、何となく分かったのは何故、やらないかっていうのがね…」

会田「はい。そういうことですね」

水島「そういうことだよねえ」

会田「そうすると、これで面白いのは、財務省はぴったりゼロに誘導できていた訳で、財務省は、とても優秀ですから。これをマイナス5ぐらいに誘導して下さいと」

水島「うん」

会田「そうすると水平に下にGDPラインをマイナス5下げるということは、恒久的な財源、マクロの財源がGDP比5%、30兆円あるということです。30兆円あれば、別に国民民主党が主張する減税で7~8兆、穴が開いたとしても問題ないですし、防衛費を倍増しても、更にそこから6兆ですから。そして、当然、公共インフラ、まあ、公共投資も今、相当、落ちていますので増やす余力というのは充分、あるんじゃないかと思います」

水島「やることは沢山ありますよね」

会田「はい」

水島「やれることはね」

会田「はい」

長尾「ということは、要は、財務省が今の財源を財源として認めてくれないっていうのはあるんですよ。常にそういう議論になっちゃうんですよ」

水島「う〜ん」

長尾「ええ」

水島「さっき言ったね」

長尾「まあ、それを変えなきゃいけない訳ですけどもね、それは、もう役人の考え方が変わらないんだったら、その上の人間に言わせるしかないんですよ。ええ。どんなに役人が反対しても上が…まあ、安倍さんでもガツツてやれなかったという現状はありますけどね」

水島「う〜ん。ただ、これは政治がやらないと」

長尾「やらなきゃいけないことは解っていると思いますね」

水島「ああ、どうぞ」

松田「バランスの話があったので、私はストックベースで、いつも見ていまして、これは対外純資産残高で、これが30年以上に渡って日本は世界一になっている訳で、アメリカは対外純負債国、世界一の累積債務国ですね。471兆円っていうのは、最新の数字で2023年末ですけども、その471兆円は、日本がこれだけ海外に余計にお金が流れているという風にザクッと捉えることが出来る訳ですね」

水島「そうですね」

松田「この中でアメリカに対する投資も世界一になっているってことが起こっている
ので、何故、これだけ、そうなるかって言うと、国内で金融資産を全部、足し合わせると
4千500兆円ぐらいあるんですが、この本源的な金融資産の保有者で、金融機関を通じ
て運用されていくんですが、国内で運用し切れていないですね。

政府だって1400兆円しか吸収していない訳ですし、だから、この運用し切れていない
部分が海外に行っているとザクッと捉えることが出来る訳です。そうすると、マクロ的な
ストックのベースのバランスは、日本は実は471兆円の財源があると」

藤「ドイツも多くなっただけですね」

松田「うん、そうですね。ドイツが随分、多くなりました」

藤「ねえ。そんなに多くなってねえ」

水島「ちょっと、もう一回、いいですか。みんな、ジッと見たいので」

藤「ドイツは、こんなに増えたんですか」

水島「はい、これね」

松田「随分、日本に追いついて来ている不思議な話で」

水島「皆さん、これを知識として覚えておいた方がいいと思うんで。471兆円ね」

松田「ええ、ええ」

水島「はい」

藤「中国が2位だと思ったら、あつと言う間にドイツが抜いたんですね」

松田「それで、こういう金融資産というのは法律的に運用すれば、また新しい金融資産を
生むんですよ」

水島「はい」

松田「ですから、例えば、私は積極財政っていうのは減税と両方、同じことだと思ってい
まして、マクロ的に見れば、国債で日本の金融資産の海外の余剰分を吸収して、これを国
内で減税なり積極財政に回して、これが国内でのお金の流れになる」

水島「うん」

松田「今、海外の流れになっているのが国内の流れになると。そうすると、また、新たな
金融資産が形成されますので、また海外に投資する部分も出るでしょうね」

水島「はい」

松田「別に、このお金を回すことが大事であると考えれば、その財源はこれだけあるんじ
ゃないのということがありますね」

水島「いや、だからねえ、そういう意味で言えば、あるのに上手くやってないっていう感
じがするね。簡単に言うとね」

松田「はい。日本は国内でお金を上手く使えてないということだと思いますね」

水島「うん。そうですね」

藤「国民一人当たりで考えたらドイツが異様に多いですね」

水島「はい、これね」

松田「何故、ドイツがこうなっているか、ちょっと解らないですが」

藤「だって人口が三分の二ぐらいじゃないですか」

水島「はい」

松田「最近、急にこんなに増えましたね。こんなに増えていなかったですね」

会田「いや、だから、ちょっとマクロな背景がありまして、ドイツも日本と同じように企
業が投資をせずに貯蓄をしまくって」

水島「ああ、ああ〜」

会田「国内の需要が弱いという問題を抱えていた訳です。これで日本はそのままデフレに行きましたけれども、ドイツはそこまでデフレに行かなかった理由というのは、所得を海外から持って来るという戦略に替えた訳です。そして需要が拡大する中国に近寄って行って、ただ、当然、そうすると、エネルギーのコスト高の問題も発生してしまうのは、それはロシアに近づいて安価な天然ガスを輸入して海外から所得をぐう〜んと持って来ることによって、日本のようなデフレに陥らずに済む訳ですね。だから所得を持って来ているので対外純資産がどんどん溜まっていったということをして…」

藤「いや、でも、これ、日本化が起きていると思うんだけどね。だって2023年度からマイナス成長が始まっているし」

会田「はい。おっしゃる通りですね。日本化が…」

藤「これ、日本と同じで…」

会田「はい。そうですよ」

藤「しかもドイツって憲法で債務ブレーキという、とんでもない制度がありますから」

松田「そうですよ、財政がちゃんと出ていないです」

藤「公共投資が日本以上に過少投資になっていますから」

会田「はい、はい。ですから日本化しなかった理由は…」

藤「えー、今、もうしていますよ。してます、してます」

会田「海外から所得をぐう〜んと持って来たことによって耐えたんですが、今、それが使えなくなったので今、正に日本化しているってということですね」

藤「ええ。いや、こんなに増えるのは異常ですよ」

会田「はい」

水島「う〜ん。まあ、これね、非常に参考になると思いますけど、一般の普通の人で言うと、この辺のことね、アメリカは色んな他の要素が沢山、あるけども、これだけね…」

藤「でも、今、結局はアメリカ人勝ちって言われていますねえ」

松田「ええ。債務者が一番、成長するんです」

藤「そうですね」

水島「ね、いや、だから普通で言うと、借金を抱えて段々大きくしていくっていうのは、普通、一般の事業をやったりする人達が借金しないで、どうやって事業を展開出来るんだと言うのが当たり前の感覚だからね、これ。負債があってもバランスシートを見ればね、あのう…」

藤「両建てですからね、ちゃんと資産とか他とのバランスとって…」

長尾「企業も個人も資産が多いところは借金も多いですよ」

水島「そういうことだよ」

長尾「だからと言って返さないっていう話じゃないので、帳簿上、そういうことで5億の借金より20億の借金の方が大きな仕事出来ますのでね」

藤「ちょっと個人的な質問で…」

水島「はい」

藤「今、日本って通貨安で輸入インフレって結構、シンドイですよ」

水島「通貨安？」

藤「それによる輸入インフレ」

水島「ああ、はいはい」

藤「私なんか原油を見ていると2008年に原油価格が147ドルで今、70ドル割っているのにガソリン価格、今、史上最高ですよ」

水島「いや、そうだよ」

藤「これは殆ど為替要因」

水島「ああ〜」

藤「これは、どうやって戻せばいいんですか。だから、その為には日銀が少し長期金利を上げて…」

田中「全く間違っていますね」

藤「どうしたらいいんですか」

田中「今の輸入価格は、意外と円安基調の中でも安定的ですよ。それはデータで見ればはっきりしているのだから円安に…」

藤「安定的、安定的ってどういう意味ですか」

田中「簡単に言うと、円安で輸入物価があまり高くなっていないということですよ」

藤「ああ、そうですか」

田中「更に交易条件で考えると、交易条件は確か2年近く改善状況ですよ。だから藤さんの言っているのは、ウクライナ戦争の初年度は確かに円安も重なって、かなり輸入物価にマイナスの影響を与えて交易条件も悪化していました。でも確か去年の…去年じゃねえな、もっと、その前から、交易条件は改善基調で、去年の夏が終わったぐらいに交易条件の分水嶺のゼロぐらいになったんですけど、また最近、この交易条件が改善している中で、また円安にいきましたけど、結局、今、どうなっているかって言うと、円高に振れていますから恐らく交易条件で見れば、つまり日本全体は海外との取引で損をしていない状況が、また暫く続くんじゃないかと思います」

藤「だって庶民感覚からすると、ガソリンが高くてしょうがないって言って、また政治的にもトリガー条項云々っていっているじゃないですか」

田中「だから、今の原油高っていうのは、簡単に言うと…」

藤「いや、原油高じゃなくて今、現に原油安ですよ」

田中「うん。原油安ですよ」

藤「だけどガソリンが高いんですよ」

田中「でも原油安だけど、コロナ禍前の水準に比べると…」

藤「低いです」

田中「ええ。え？」

藤「低い、ああ、低いです」

田中「そうですか」

藤「もう70ドル割っていますから」

田中「ああ、70ドル割っているか」

藤「はい。だから…」

田中「ああ、確かにそうです」

藤「もう150ドルの半分以下ですよ」

田中「うん」

水島「っていうことは、何…」

田中「うん、それなら、それだったらいいじゃないですか」

藤「いや、だから殆ど円安要因で、ガソリンの値段が高いんですよ」

田中「いやいや、いや。そんなことは無いって」

藤「だから経産省が補助金を出しているから未だ180円ですけど、無かったら史上初の200円越えになっちゃっているんですよ」

田中「うん、だから、別にそれでもいいじゃないですか。そんなに今、円安効果で、石油が高くなっているっていうのは、ちょっとデータから裏付けられているのは…」

藤「いや、データは…」

田中「やっぱり交易条件っていうのは政府の支援とか全然、入っていませんから」

藤「いや、だから、それはデータで裏付けられてますよ、そういうのは殆ど為替効果ですから」

田中「いや…」

会田「エコノミストも間違いがあるんですけども、原油、まあ、例えば原油価格が高止まったり、円安の水準になったりするのは、物価の水準は上げて物価上昇率は永遠に2とか3に居る訳ではないということですね。いずれゼロに戻る訳です。ということは、価格の水準が上がったということは、その分、民間の購買力が衰える訳ですから、そこは財政に余裕があるのであれば、ただ、財政が埋めて上げればいいって、それだけだと思います」

藤「だから本来ならガソリンの補助金なんか減らすんじゃないかってことですか」

会田「はい。トリガーもちゃんと引くべきだと思いますね」

田中「そう。だから円安を問題視すると、結局、ちゃんと利上げしていくっていうね、利上げで円安を抑えていくって、そうすると経済がおかしくなっちゃいますよね。だから、そういう風にするのは拙いので、下策なので、今、会田さんの言ったように財政で、その分を補填してあげなきゃいけないんですが、それを今、やめている訳ですよ」

会田「はい」

水島「だから、そうだね」

田中「だから出口が無くなっちゃっていて、もう早く選挙前倒し出来ないけど（笑）」

一同「（笑）」

田中「自公政権に退出するか、正直言って、高市さんとか期待している人が居ますけど、高市さんが、例え今の石破政権に対して批判的なことをXで言っても、もうXのコメント欄は高市さんに対する批判もいっぱいですよ」

水島「うん」

田中「つまり自民党はねえ、かなり手遅れ感がありますね」

水島「いや…」

田中「うん、救世主が居ない」

水島「だからねえ、それはねえ、ちょっと経済とは違うかも分かんないけどもね、それはありますよ。この間、今日、ちょっと紹介したんだけど、安倍さんがウクライナ戦争についてロシアにもあったっていうことを、はっきり言っていた訳ですよ。つまりロシアの侵攻を合理化するつもりはないが、でもロシアは、約束を破られてNATOがずう〜っと東方拡大をして来た。それでギリギリまで来たからと、何度も何度もプーチンから聞かされていると。我々は外へ侵略するつもりなんか全く無いと。向こうがどんどん来たのでという風に安倍さんが言っているんです。あの時、これを言うのは命懸けですよ。直後だからね。

昨日と今日、紹介したんだけど、そういう意味で言うとねえ、今、高市さんの問題で言うと、高市さんが昨日、一昨日かなXで出たのは全然、変わっていないですよ。ロシアのウクライナ侵攻をね、トランプとも違う、まあ、前と同じ。ロシアが侵略したからもっと、ちゃんとやらなきゃいけない」

藤「ああ、そうなんですか。駄目ですね」

水島「いや、だから、今、私は高市さんに変わって貰いたいと思ったの。ところが、もう全然、変わらない。だから戦後のねえ、こういった日本の希望だって、みんなに言われていた人が、みんな、そういう状態ですから推して知るべしでね。田中さんが言ったことは

その通りなんだ。だから、みんなでX上でも何でもね、私は凄く熱烈に、そういうマシな人だとは言って来たけども、でも、やっぱり安倍さんとは全く格が違う」

田中「まあ、あれですよ、ちょっと国際政治のことは確認していないので解らないですけど、でも高市さんの経済政策観で大胆に変わるべきなのに変わっていないところっていうのは恒久減税ですよ。つまりあの人は消費減税みたいなことについて否定的ですから」

水島「そうですね」

田中「だから、政策のアドバイザーみたいな人に、僕の知り合いも何人も居るみたいなので、もし、彼女に大胆なものに替わって欲しいとすれば、それと恒久減税。まあ、端的に消費減税を、もっと打ち出すべきだと思いますね」

水島「やったらもっと人気が出ると思うね」

田中「ええ。そうしないと、もう生き残れない」

藤「ドイツのケースを申し上げると、実はあまり注目されていないんですけど、今回の選挙で極右極左が3割、取ったんですよ」

水島「うん。AFDがね」

藤「AFDと左派党と…」

水島「左派党っていう…」

藤「あとBW党ですか」

水島「はい」

藤「だから多分、日本もそうなるんじゃないんですか」

水島「ただね、これが面白いのは、あ、ちょっと、ごめんね、直ぐ終わりますから」

長尾「高市さんの話を」

藤「ああ、どうぞ。すみません」

水島「今、ちょっと、ここだけ言っておくと…」

長尾「ああ、じゃあ、いいです。はい、どうぞ」

水島「結局、でもショルツから今度、変わるんですよ」

藤「はい」

水島「メルツっていう」

藤「はいはい」

水島「CDUのね」

藤「CDU、はい」

水島「CDUに替わるんですけど、これが中道右派と言われているけども、ブラックロックのCEOです」

藤「だって、あの人が債務ブレーキの見直し反対の緊縮財政論者ですから」

水島「まあ、そういう、あれですから全然、ショルツ政権と変わらないっていうね」

藤「うん」

水島「連立だとしても、AFDとやる訳が無いからっていうことですね。はい、有難うございます。じゃあ、長尾さん、お願いします」

長尾「高市さんの総裁選の時に、やっぱり選対の中で今、田中先生がおっしゃられたことを、もっと言えと。ええ。散々っばらやりましたね」

水島「うん」

長尾「ええ。ただ減税はしないと一度も言ったことはなくて、減税をしたいのか、したくないのか、ご本人は僕らの前でも、その辺はあやふやにされています。ただ確実に言えるのは、まず経済を最初に動かしていくと、まあ、そういう公共投資。ここは、はっきりしているんですね。ただ減税をやらないということは一度も聞いたことは無いです」

田中「ただ、ただ…」

長尾「ええ」

田中「今、やっぱり世論調査なんかで若い人の支持を集めているのは、明らかに減税を主張している政党ですよ」

長尾「そうですね」

水島「れいわとかね」

田中「(頷く)」

長尾「例えばSNSや世論でも、全ての政治家がそういう感覚をもっているかどうか判らないし、私みたいなキャリアの浅い人間と総理を目指すような、或いは、総理を経験した方とは見方が違うと思うんですけど、世論や特に最近のXの投稿。こういう投稿をしたら、きっとバズるだろうなあっていうワードは解っているんですよ」

会田「うん、うんうん、うんうん」

長尾「解っているですよ。解っているんだけど、ここで言うかどうかっていうところは相当、高市さんも考えていると」

田中「うん」

長尾「それが、どう出るかっていうのは、それぞれの政治家のセンスですね。ええ」

水島「うん」

長尾「例えば、高市さんも直接、この話を確認した訳ではありませんけれども、恐らく、ああいう厳しめの批判が来るということは多分、判っていると思うんです」

水島「うん」

長尾「ええ。そういうことを見据えながら、やっぱり政策を訴えるっていうのは、政治家の一番、大事なところだと思うんですが、それを実現する為にどうしようかっていうことの方が、実はウェイトは大きくて」

水島「うん」

長尾「僕ら政治家って必ずしも専門家ではないので、色んな専門家の皆さんの意見を戴きながら創り上げるっていう部分があるので、高市さんに期待してくれと言う話では無く、やはり高市さんは言えばウケることは絶対、ワードは分かっている。ええ。分かっているけど今、敢えて、そういう形じゃなくて、ああいう表現。ただ、僕ねえ、例のウクライナの件は、僕も読んで(笑)、あれっと思ったんですけども、経済政策については、やはり会田先生のようなお話等を、我々政治家にどんどん注入して戴ければ、ただ、僕は3年前に脱落しましたけれども、やっぱり3か月前に同じ財政出動派の仲間達がガンガン落選をしましたので、今、党内的には本当に少数派になってしまったっていうところ。だから選挙で、僕らが戻る、みんなが戻るしか、僕らも頭になくて、でも、戻って来ると困る人達からすると、選挙は勝っても負けてもどっちでもよくて…」

藤「そうですか」

長尾「解散総選挙なんかやったら、また、あいつらが戻ってきたら困るだろうなと。野党も今、選挙が無い方がいい訳ですよ」

藤「財政出動派側が落ちちゃったんですか」

水島「凄く多いですね」

長尾「財政出動派が大勢、落ちました」

藤「何故ですか」

長尾「結局、ピンポイントな何かは判りませんが結果論ですね。ええ。とにかく、財政出動派は片っ端から落選しました」

水島「確かに長尾さんが言うように…」

長尾「三か月前」

水島「そういうのに積極的な人達が落ちていますよね」

長尾「落ちている」

水島「だからね、まあ、戻った方がいいっていうのは、その通りだと思うんだけど…」

長尾「僕らは早く戻らなければ、数を取らなければどうにもならないので、ええ」

水島「だからね、その為にね、玉木さんっていうのは、ここにも一回、出たことがあってね、減税の話とかしたことがあって、何かやけに物分かりのいい奴だになっていう感じがしたんだけど」

長尾「(失笑)」

水島「ただ、あのう(笑)、ちょっと調子がいいっていう感じですけど、ただね、私が思っているのは、今回の国民民主が手取りを増やすということで人気を得た訳ですよ。あれは本当に庶民感情にね、今、苦しいんだよっていうね」

長尾「響いたのは響きましたよね」

水島「だから、そういう意味で言えばね、高市さん、いや、厳しく見なきゃいけないのは石破が出ちゃったってことですよ。あれだけ一時はトップで争っていたのに、石破が総理になっちゃった訳ですよ。何故かってことを考えた時、一発、足りなかったんですよ。もう既成の自民党の選ぶ人達が最終的には色んな事情で、あっちを選んじゃった訳ですよ。

でも高市さんが、もし今言った経済論、或いはウクライナ論とかね、トランプと同じことを言う、今、私が自慢しているのはそうです、3年前、私はトランプと同じことを言っていますよ、ということを行っているんだけど、本当に長尾さん、会う機会があったらね、私も前は会っていたんだけど最近、会わないから機会がないけれど、是非、伝えた方がいいと思いますよ。選んでいる時じゃねえぞと、まず自分がやって、みんながついて来るかどうか、それは勝負かけなきゃいけない、本当の…」

長尾「だから、その勝負を何処でかけるかっていうのは、それぞれの政治家の判断だと思うので…」

水島「それなら、それでいいんだけど、ただ今、うん」

長尾「例えばネットや世論は、ここだっていうことは、もう百も承知だと思います」

水島「うん」

長尾「ええ。それも含めて評価ですから。ええ」

水島「そういうのも、まあ、いいですけど」

長尾「はい」

水島「とにかく機を見るに敏くないとね」

長尾「うん」

水島「うん。決断しないと、今のまま、そのまま行っちゃうっていうね」

長尾「決断は何処かでやると思うんですよ。ええ」

水島「まあ、それを期待したいし、期待しましょう」

長尾「はい」

水島「それとね、今、前半で休憩に入る前に、この間、立民の原口さんが来てね、社長、明日、国会で質問します。それで何をやるのって聞いたら、日銀の株主の話を書きますから聞いておいて下さいって」

長尾「今日、多分、やっているんです。今日、財金でやっていますね」

水島「あのう、もう、やったんですよ」

長尾「今日、やっているんじゃないですかね」

水島「いや、もう映像があるので、チャンネル桜で流したんでね」

長尾「あ、失礼しました」

水島「それで日銀が何と答えたかって。その映像があるから、あとで見せてもいいんだけど、政府が持っている株が55%になっていると聞いていますと。で、45%は何ですかと聞いたら運用の問題につき、お答えできませんので。えっ、ああ、解りました。じゃあ、質問を変えますとね。日本人ですかって聞いたら（笑）、これも投資の、運用の為に、これもお答えできないって、前、一回、流れているんですよ。何とかチェンバー何とか銀行とかね」

藤「あ〜…」

水島「これ、外国の銀行ですよ」

藤「なるほどねえ〜」

水島「だから、この問題はどうしても出たくないというね。この問題と、皆さん、答え難いのか分かんないけど、特別会計って何だということです。財務省が持っている特別会計って一体、何でしょうと。こういうものを使えとか使わないとか色んなことがあるんですけども、その財政赤字とか色々言っているけど、この特別会計というものがあることは、我々も判っているし、ある程度は使うということがあるけど、一般論で言うと、これって何ですか。松田さんに聞いた方がいいのか藤さんか、どっちがいいんだ」

藤「松田さんがいいんじゃないですか」

水島「ああ、一般論でいいですよ」

松田「特別会計ですか」

水島「ええ」

松田「ああ、特別会計については、ちょっと注意すべき点はあるんですけども、所謂、資金の出入り、例えば国債整理基金特会のようなもので、物凄く金額が膨らんでいるので、あれを合わせると何百兆もあるという誤解をしている人が多いんですが」

水島「ああ、はい」

松田「それと違って事業をやっている特会っていうのを足し合わせても、そんなに、まあ、最近の数字は掴んでいないんですが、そんなにないので…」

水島「そんなにないっていうのは100兆以下とか…」

松田「もっと全然少ないです」

水島「ああ」

松田「それで、それも、特会の問題にメスが入ってから、母屋でとか離れでっていう話があってからメスが入って、大分、整理されて来てですねえ…」

水島「ああああ」

松田「昔のような伏魔殿みたいなことは、あまりなくなっているんですが、ただ問題は、お金が余っている特会が結構あるんですね」

水島「ああ、なるほどね」

松田「それから基金なんかも今、どんどん積んでいて、このことまで全部一般会計の外にしちゃっているんで、そういうのを総合して見て財政を見なきゃいけないんですが、そこが出来ていないのは問題ですね」

水島「う〜ん、それと、あまり公開されていない、あまりって言うか殆ど公開されていないじゃないですか」

松田「いや、そんなことないですね。基本的な事は一応、公開はされています」

水島「ということは財務省のホームページを見れば…」

松田「まあ、一応、財務省、各省庁、所管省庁は公開不十分っていうのはあるかもしれま

せんけど、一応、ここで公開されています。だからこそ、さっき言ったバランスシートで全部、政府をきちっと把握する、連結で把握する仕組みというのを詳細につくるべきじゃないかなあという風に思いますけどね」

水島「う～ん、うん」

会田「それ、松田先生がおっしゃる通りでして、財政収支って見難いんですけども、先ほどご覧戴いた資金循環統計って日銀の統計から取っているの、ここで有る財政収支っていうのは一般会計だけではなくて特別会計も含んだ部分の収支なので…」

水島「ああ、う～ん」

会田「ちゃんと資金循環統計を見ると、全部、纏めた収支というのは四半期が終わって、もう2か月、3か月後には判る状況はなっているので、こういうところを見ながら考える必要があるとは思いますがね」

水島「なるほどね。それを差配するのは財務大臣ということですか」

藤「いや、全部、財務省ですよ」

水島「主計局長とか」

藤「はい」

松田「一応、主計はやっているんですが、全然、マクロ経済を見ながらなんていう発想は全く無いですね」

藤「いや、無いですね」

水島「なるほどね」

松田「とにかく自分の庭先、一般会計を綺麗にすればいいっていう…」

藤「(頷く)(笑)」

長尾「でも重複も大分、少なくなりましたね」

松田「まあ、なりました」

長尾「ええ」

松田「はい、少なくなりました」

長尾「前々は、もうドカア～ンと別で、あのう…」

一同「(笑)」

水島「なるほどね」

長尾「母屋より離れの方がってあったですけど、だから、よく、何故、ここに、こんなのがあって、よく見てみると、意外と各省庁の予算が、こちら側に数字だけ乗っかっているっていうところがあって、ええ」

水島「いや、だから、さっき、ちょっと出ましたコロナの時の財政出動。あれは20兆ぐらいでしたっけ」

会田「100兆円です」

松田「100兆でした」

藤「あれ、結構ね…」

水島「あっ、100兆だったっけ」

会田「はい」

藤「あれね、ちょっと経産省的に言うとね」

長尾「だから、いい実験台になりましたよね」

会田「(頷く)」

藤「あれは結構、コロナの目的外使用っていう問題になったじゃないですか」

水島「はい」

藤「でも財務省さんの方から、一般会計から特会に乗っけてねって誘導されてやって、あ

とで責任だけは他省庁がとるっていう構図になっていますから、そこは本当に財務省って
狡いですよ」

水島「なるほどねえ」

松田「本当に狡いですよ（微笑）」

藤「ね（笑）」

松田「ええ」

藤「だから、松田先生がおっしゃいましたけど、名前は変わったけど権限は変わっていな
いから、むしろ二十一世紀から増えていますから」

水島「ああ、そうか。私、間違えました。消費税をゼロにすると1年で20兆かかるって
いうね。21兆かね、何か。ああ、そう100兆、前にそれでやったんですね。破綻しな
かったじゃないかと（苦笑）」

藤「いや、そうです」

水島「国債で暴落もしなかったろう」

松田「日銀が無制限に国債を、どんどん買っていたんですよ」

水島「ですよねえ」

松田「だから、さっき言った日銀のバランスシートが膨らんで、ここで吸収出来たので」

水島「はい。それと、もうひとつ…」

会田「これも、ご覧戴きたいんですが」

水島「はい」

会田「これが政府のネットの負債残高、GDP比です。ご覧戴くと、ずうっと名目GDP
が膨らまなかったんで、この負債残高GDPが上がってしまったんですけども、コロナ
でぐう〜んと財政を出した結果、名目GDPが万年525兆円平均になったのが610兆
円まで来てしまった結果…」

水島「うん、そうですね。凄いねえ」

会田「今、ぐう〜っと改善して、過去に国債の格下げと同じように動いているんですが、
今、格上げされてもおかしくないぐらいの水準まで改善しちゃった」

水島「ああ、そうか」

会田「今、財政を出したら、財政が改善しちゃったっていう証拠は、もう出て来ている訳
です」

長尾「だからコロナって、そういう点では本当に僕らの生活様式もガラリと変えたし」

水島「ですねえ」

長尾「ええ、そりゃあ、コロナで今日はその話はしませんが、注射の件でね、まあ、大変
な問題も出て来ているけど…」

水島「はい、ありましたね」

長尾「また凄く大変な業界もあったと思うんですけど、めちゃくちゃ儲けている所もある
し…」

水島「いや、そうですよ」

長尾「やっぱり一番大きいのは、経済があんだけ動いていないのに100兆円を出して、
これだけ効果があったじゃないかとね（笑）」

水島「だから凄くいい証拠をね…」

長尾「動いていないのに、あれだけ結果が出来ているということは、我々、或いはチャン
ネル桜さんで議論してきたことが、その通りだったっていうことをコロナで証明されてい
るんですね」

水島「そう。ああ、間違っていなかったということをね。そうですねえ」

長尾「はい」

水島「いやあ、今言ったように、長尾さんがちゃんと言ったように、凄く得したところもあればというのがあったっていうのは、ただ、そういう意味では良かった訳ですよ。証拠も作れた。財政出動しても簡単には破綻しないみたいなことをいうことですけど、今言ったような問題で、ああ、それと、もう一つ、原口さんが言っていたのが、やっぱり日銀の政策決定とか、こういうのに本当に政府の意向だけじゃなくて、やっぱり、はっきり言うと、前に出たんですけどね、外国の金融資本家が株主に加わっているというね。だから日本の経済を中心になっている日銀は、そういう形で影響を受けながら利上げしたり下げたりするということも、我々は、ちゃんと含んでおかなきゃいけないなということがあると思います。我々は日本が完全な主権国家じゃないということを、ずっと言い続けて来たんですけども、色んな意味で、これも参考にして貰えればと思います。後半は、是非、皆さんがさっき言った色んな手があるということがありますけれども、何とか日本の国民が幸せになる為、経済的にね、ふんだくられているという感じが凄くあるんですよ（失笑）、だから、それを払拭する為にどうしたらいいかということを含めて皆さんと議論できればと思います。一回、お休みします」

一同「(礼)」

<後半>

水島「はい。後半になりました。後半は、これからどうするというのと世界経済をね、今、色々トランプ時代で、これは、はっきり言うと、我々は革命だと思っています。レーニンの10月革命よりも大きなやり方になるんじゃないかと。それはトランプ自身が言い始めていますけど、あのロシアの侵攻を侵略と見ないと。ロシアとアメリカが連合する形になる。もし、そうなると、食糧からエネルギーから軍事から全部、自前でやれる大国二つが連合すると大変な力になって来るだろうと。そういう意味で、足りないなら、ウクライナのレアースを二人で取っちゃおうと。はっきり言うと、見えているのは、ウクライナはどうでもいいみたいな感じで、ゼレンスキーは、もうボロ雑巾みたいに捨てられるだろうと、私は最初の頃、言ったんですけど、追々そうなると思いますね。でも、こういう中で未だ一生懸命、オルバンやイタリアのメローニ、こういった保守とか保守派と言うか極右と言われるAFDとか、こういうものが出ているのにも関わらず、これはドゥーギンという哲学者が言っていたんですけど、グローバリズム、リベラリズム対ヨーロッパの今、イーロン・マスクがやっていることは、所謂、反グローバリズム、まあ、保守主義と」

藤「うんうん、うん」

水島「まあ、この構造が、そういう日本の思想、思想観の中には通じていないんで、本当に、どうしていいか分からなくなっていると。トランプを変った奴とか変な奴とか、何をするか分かんない奴みたいなね、気が狂っている男扱いとかね、こういう性格の問題とか、そういうのをやっているけれども、実際は大きな形で変えようとしている。それから、これは相互関税論ですよ。こういったものに、一体、どういう影響を与えていくんだろうか。25%、3月1日から本当にやるかどうか判りませんが、カナダとかにね、こういうことをやるって言っている」

藤「うんうん」

水島「日本にも自動車とかの関税をかける可能性がある。USスチールも、今度は特別にトップが会うそうですけどね。やることはどうなるか判らない。結構、今のウクライナに対する行動を見ていると、相当、厳しい周りの国、アメリカ・ファーストっていうのは、本当にアメリカ・ファーストだったと。他の国は構ったことではないというね、そういう色合いも結構、凄く出ている中で、石破さんは相変わらずのG7路線でロシアを批判し、このまま行ったらアジアはロシアに占領されるみたいな流れを外務大臣と言っているっていう、まあ、中国が一番、それを喜んでいると思いますけども。それから、もしかしたら、これは長尾さんが知っていたら教えて貰いたいけど、5月ぐらい迄に訪中するっていう噂があるけど」

長尾「(頷く)」

水島「お前、一体、何をするつもりだっているのがあるけども、そういう話も色々出ていましてね、いや石破さんだったら本当に何かやり兼ねないということがあるので、そうすると一体、我々の国の関係は反トランプ、反米になる。

それと今言ったそういう系統になって来ると、経済関係がどうなるだろうと。そういう理由に25%関税とかね。我々のところへかけられたら、もう、これは大変なことになる。カナダは25%やられたら、カナダは滅びますとまでトルドー首相が言っていると。まあ、皆さん、経済の専門家として、どういう感じで、このトランプ式の経済は、どんな影響を与えるか今、中々見えないとは思いますが、是非、御意見を聞いてみたいなあと思いで、松田さんからいいですか、はい」

松田「ああ、そうですか、はい。世界の経済がパラダイム・チェンジを起こしていて、もうグローバリゼーションの時代が終わってブロック化の時代に入っていて、しかも、それぞれの文明圏ごとに分解されていくという流れになっていると思うんですね。それで、トランプさんが、それを促進しているという風になっているので、我々は今迄、グローバリゼーションは良い事だという発想からも離れなくてはいけなくて、まず国家があると。国民経済が大事だと。国民経済を良くする為にどうしたらいいのか。まずトランプがアメリカ・ファーストと言ったように日本は日本ファーストだし、それぞれの国は自分ファーストで、しかし、だからと言って国際享受をしない訳ではなくて、前も言ったかもしれない、グローバリゼーションじゃなくてインターナショナル化の時代。

国家の存在、国民の存在を前提とした上での協調ということを考えなきゃいけなくなっているということだと思います。そういう意味でトランプが今、世界のパラダイム・チェンジを起こしている。それから今迄、マーケット・エコノミーが一番、いいんだと。経済合理性がいいんだという世界が終わっていて、もう既に企業もね、経済安全保障まで考えなきゃいけないという時代になっている訳なので、やっぱり、国家ということ、もう一回、全面に立てた上で経済活動をどう考えるかというところに、頭を切り替えなきゃいけないという時代だと思います」

水島「そうですよね」

松田「その上で、実は国家には国家の役割があるんだということ、日本は、もう一回、見直すべきだという風に思いますし、あとでも言いますが、その為の積極財政も必要だという風に思っています」

水島「はい。有難うございます。藤さんは、どうですか」

藤「だから、トランプさんが前のめりで云々とか言われていますけど、チャンチャラおかしい話であって、元々伝統的な地政学者のミヤシャイマーは、本来なら、中国がライバルナンバーワンでジュニア・パートナーがロシアなのに、何故、中国とロシアをくつつける

のだと」

水島「うん、そうですね」

藤「むしろ50年前にニクソンがやったように、彼はジュニア・パートナーで、今、ロシアと組んで中国を封じ込めればいいっていう話を、やっとトランプさんがやったっていうことで、前のめりって言われていますけど、そもそも私もロシアにウクライナに手を出させたっていうのは多分、アメリカが相当、挑発してやった結果ですから…」

水島「そうですね」

藤「やらなくてもよかった戦争で、何らアメリカにとって、バイデン政権4年間で何ら、アメリカの例えばコールが上がった訳では無いので、もう不良債権ですから損切、サックコスト」

水島「損切だ、なるほど」

藤「それを早くやった方がいいっていうのは極めて合理的であって日本からして見ても、本当に日本の外務省って馬鹿ですけど、ヨーロッパ流のプロパガンダに未だ乗っちゃっているんですよ」

水島「うん。そういうことになってますね」

藤「ウクライナがやられたら、次はアジアだって。そんなことはありません。この間、マクロンがトランプさんに会った時にロシアは次を狙っているって言いますが、歴史を考えたなら少なくともロシアはヨーロッパから攻められたことがあっても、ロシアは西洋に進出したことがないんですよ」

水島「うん」

藤「ナポレオンとヒトラーだけであって、そんなことを言っているヨーロッパのロジックに未だ日本の外務省、これはバイデン政権経由ですから、だからバイデン政権が言ったから乗っちゃっているんでしょうから、でもバイデン政権がトランプ政権になったのに未だヨーロッパのプロパガンダが効いちゃっているっていうのは本当におかしいなあと思って…」

水島「うん」

藤「ですから本当に高市さんが、もし、そういうことをおっしゃるんだとすれば、本当に一刻も早く変えて戴かないと。勿論、逆にアメリカが本気になってロシアと組んで中国に向き合うのであれば、これぐらい日本にとってメリットは無い訳ですから」

水島「そうだよな」

藤「だから、それは一刻も早く、そういう考え方を永田町で改めて戴きたいなっていうことを是非、長尾さんをお願いしたいです」

水島「そうですね」

藤「ただトランプさんは、そういう意味で、非常に良い事をやっているんですけど、私は正直、トランプ第二期政権は少なくとも今年の上半期にアメリカは、とんでもないリセッションに陥るんじゃないかと、私は思っているんですよ」

水島「それは、どういう感じですか」

藤「一つは、今、言われていますけど、やっぱり関税インフレ」

水島「うん」

藤「関税率を上げる前から、今、アメリカが相当、前倒しで消費していますから、物価が上がって来ている」

水島「うん」

藤「それから、もう一つは未だ日本で言われていませんけど、マスクさんが今、物凄い事をやっていて連邦政府の支出を止めたりしていますよね。実は、憲法違反だとか法律違反

だって言われているんですけど、それによって何が起こるかって言うと、政府からの投資とか消費が減るので多分、マクロ経済上、物凄く拙いんですよ。

もし、これでアメリカが不景気になったら何が起こるかと言うと、マクロ化している金融市場がどうなるか判らない。ですから多分、アメリカ自身の経済が相当、おかしくなりま
すから、その時にトランプさんはどういう風にするかは分かりませんが、少なくとも、その外形、安全保障面は物凄くプラスでも今やっているトランプさんの政策は多分、経済にとっては物凄くマイナスですから」

水島「うん」

藤「しかもベッセント (Scott K. H. Bessent) 財務長官が昨日か一昨日に言っていましたけど、今、失業率が相当、低いつて言っていますけど、多分、相当、政府が生み出している雇用が多いらしいので、その影響によってアメリカが急に非常に悪くなってきますから、その時、アメリカがどうなっていくのか、アメリカ・ファーストで内向きになっちゃうのかどうなのか全く判りませんが、アメリカが本当に日本の唯一の同盟国ですけど、どうなるか判らないっていう意味で、やはり日本にとっては最大の関心であり…

水島「そうですね」

藤「リスク・ファクターはアメリカだっていうことが多分、五十数年ぶりに再認識される年になるんじゃないかなあと思っています。以上です」

水島「そうですね。だから、我々が見たいのは、あの関税で脅かして、自分の国を、もう一回、工業とかそういうものを殖産興業というものをやりたいと言っているけど、これ、本当に成功するものなのか、実は技術者も何も居ない、もう居なくなっちゃっていると。空洞化しているからという言い方があって、それも言われている。それから関税を増やして国民の税金を減らすんだってね、これも言っているんだけど、これも本当にリアリティがある話なのかというようなことも言われているんでね」

藤「全然、ないです。あと、もう一つ加えると、今、何か100年前のマッキンリーさんの関税の話が出ていますが、今の状況と比較した時は1930年のスムート・ホーリー法 (Smoot-Hawley Tariff Act) ですよね。大恐慌のあとに物凄く関税を上げて、それによってアメリカの貿易赤字が減って、世界の需要が落っこってヨーロッパは大変なことになって銀行が潰れて、それでそういう33年でアメリカのバンクホリデーが起きていますから」

水島「そうですね」

藤「だから関税を上げることによって、上げるというメッセージだけでもアメリカの貿易赤字が減るっていうことは世界の需要が減りますから、さっき言いましたようにあれだけの借金含めて、これだけ経済がいい訳ですから」

水島「うん」

藤「そうなって世界の需要が減ったらどうなるか。本当に大変なデフレが起きて、まあ、リーマンショックになるかどうかは別として、やはり世界は相当、おかしくなるっていうことは目に見えていますから」

水島「そうですね」

藤「多分、そこを覚悟しなきゃいけないでしょうね」

水島「丁度、昨日、FRBが利下げをすると」

藤「利下げする？」

水島「ええ、利下げですね」

藤「利下げは出来ませんよ」

水島「いや、一応、何か、そういうニュースをロイターで…」

藤「年内は出来ないっていう観測の…」

水島「ああ、そう。ちょっと見たんだけどね」

藤「いや、インフレ懸念ですから利下げは絶対に出来ないです」

水島「ああ、そうか。まあ、逆だったかなあ」

藤「はい」

水島「ちょっとチラッと見たんですけど、まあ、対応しようとしているっていうね、FRBを敵視しているところがあるじゃないですか」

藤「う～ん。だから、FRBの構成する色んな連銀の人達は大体アメリカのスタッフレーションって、また言い出していますから」

水島「ああ、そう言っているのか」

藤「はい」

水島「う～ん。はい。じゃあ、その辺の皆さんの意見も聞いてみたいと思いますけど、田中さんはどうですか」

田中「FRBは今、やっぱり利下げを探っているんじゃないですか。まあ、これはニュースですからね。アメリカ経済が下振れリスクが現れる可能性があるということで、藤さんの言っている事も、もっともですよ。どうしてかって言うとアメリカの期待物価上昇率が結構、上昇していて、多分、4%を超えて来ているんですよ。だから、それが将来的な物価上昇に結びついちゃうと利上げする可能性もあると。

つまり何を言いたいかって言うと、利下げする要素もあるし、利上げする要素もあって、正にトランプ政権の経済政策の齎すトランプ的不確実性って我々の業界では言っているんですけど」

水島「なるほど（笑）」

田中「つまり普通の天気予報と違うんですよ。天気予報だったら雨の降る確率、今日だったら10%とかね」

藤「そうですね」

田中「確率を凄く振ることが出来ない。だから、それが結局、アメリカ経済が、どんな形なのか。本当に物価が上昇しちゃうのか。或いは、経済が低迷して物価はそこそこ上がるけれども、消費や雇用とか設備投資に悪影響が現れる様な現象になっちゃうのか、その先行きが、みんな、未だ判ってない訳ですよ」

水島「うんうん」

田中「だから、そういったトランプ政権の政策というのは、今言った確率を振ることが出来ない。晴れだか曇りだか雪だか判らないような状況が依然として続いているというところで、解釈がバラバラになっちゃって、FRB自身は恐らく官僚組織なので、いい意味でも悪い意味でも去年、利下げモードに振れた訳ですよ。だから、相応の理由がないと利上げに転換できないと思うんですよ」

水島「うん」

田中「今、ベンチマークじゃないんだけど、一応、消費者物価みたいなものは、今言ったように予想物価上昇率が4%を超えて来ていますが、僕は足元の様々な指標を見ないと、そう簡単に利下げモードを転換して利上げに移るっていうことは、FRB的な発想ではないだろうと。そこまで大胆に決め打ちして来るとは無いと思いますね。決め打ちしてきているのは何と言っても日銀」

水島「なるほどね（笑）」

田中「日銀は一体、何処へ向かうのか、日銀のことを、ちょっと言っていていいですか」

水島「はい、勿論。どうぞ」

田中「この間、植田さんが国会に行っただけ、もし、長期金利が急激に上昇したら、これ、長期国債の買いオペみたいな、介入するというようなことを言っていましたよね。でもそれって本当に彼のレトリックで、そういう一時的なものであるかもしれないと。でも、それが、今後、日本の長期国債の利回りの急上昇が、もし頻繁に起こるような形になったら、要するに、誰がどう見ても緩和的な環境じゃなくなる訳ですよ。その時に国債の買いオペをして、その長期国債を下げるということは、今、日銀が方針として執っている長期国債の利回りは市場に任せて、我々は昔からやっていた短期金利、短期の政策金利だけでコントロールしますよって、昔に戻って正常な彼らの言っているところの金融正常化に戻している訳ですよ」

水島「なるほどね」

田中「それからいったら、矛盾することをやり始める訳ですよ」

水島「うんうん」

田中「これって昔、日銀のデフレ対策が失敗した時に頻繁にやっていたことですよ」

水島「なるほどね」

田中「つまり長期の金利が上昇しちゃって、それで介入していくと。抑えようとしている訳ですよ。一方で量的なところでは、そんなにね、さっきの松田さんの説明と同じだけど、量的なところとは緊縮的なスタンスをとっちゃって、矛盾する事をやっている訳ですよ」

水島「うん」

田中「量的には緊縮で、金利だけは抑えたい。だから、その都度、詐欺圧力みたいなのをかけるんだけど、所詮、矛盾したことをやっているんで、結局、経済的な効果は抹消されちゃって、デフレ脱却みたいなことには繋がらなかった訳ですよ。そのうち政策金利、短期金利も下げ始める訳。それが90年代の終わりから21世紀になってから表れて、結局、その状況が改善されるのは、アベノミクスが始まるまでかかっちゃった訳ですよ。だから、また、そういった失敗になってしまったら、今回の日銀が本当に失敗しちゃったら、これはシャレがきかない。過去に一回、政策転換やって、それを見殺しにしちゃっている形で政策転換、植田さんになってから平常に戻すとやった訳ですよ」

水島「やりましたね」

田中「ええ。だから、このインパクトは大きいですね。取り返しがつかなくなっちゃって、日銀の中でも大変じゃないですか。別にいいですけど、官僚機構だから、今後、トランプ政権の政策次第によって今言った不確実性でねえ、どう転ぶか分かんないですから。その中で決め打ちみたいな姿勢を執っているのは日銀だけですからね」

水島「いや、そうなんだよね」

田中「その中で全部、トランプ・リスクを日銀が引き受けちゃっている訳だ」

藤「いやいや、いやねえ」

田中「はっきり言って、これ、ヤバイですよ」

水島「うん」

田中「何度も言いますが、もし、本当に日銀が今の正常化を、また非正常化に戻せるのかって言ったら、これは、そんなにFRBも変わり難いかもしれないけど、日銀はもっと変わり難い。その変わり難さを負担するのは我々国民ですから」

水島「そうですね」

田中「ええ」

藤「それ、リスク高いですね」

田中「はい」

水島「いやいや、その決め打ちをやっているなっていうのは本当にそうだよな」

田中「凄いですよ。もう丁か半が出るか分かんないのに絶対に半が出ますと、ずっと言っているんですから」

水島「ねえ。そういう感じだよな。う～ん」

藤「だから日銀って、やっぱり利上げしたら勝ちですから」

水島「うん」

藤「利下げ負けですから（笑）」

水島「そうか（笑）、はい。有難うございます。では、長尾さん、どうですか」

長尾「いや、決め打ちってねえ、あのワードは凄く解り易いですよね。金融だけじゃないですよ。もう外交も決め打ちじゃないですか」

水島「うん」

藤「外交は本当に問題ですよ」

水島「本当にそうだね」

藤「ほんとにねえ」

長尾「停戦って言っているのに…」

水島「だから、そうですよ。もっと柔軟にすればいいのにね」

長尾「ええ。停戦って言っているのに、岩屋外務大臣は『ロシアを勝者にさせてはならない』とか…」

水島「そうなんですよ」

藤「はあ～…」

水島「だから、もうデンマークの女の人と同じだ」

長尾「まあ、ドンパチやっている間に色んな議論をするのはいいですよ。だけど、停戦の協議をし始めている時に…」

水島「うん。そうだよ」

長尾「勝ちも負けも、その概念は無しに、取り敢えず平和をつくろうって言う時に、石破総理は、またウクライナを支援しますって言っちゃっていますよね」

水島「だから、どういうことかねえ、危ないですよ」

長尾「決め打ちって本当にいいワードをお聞きしたなと思って（笑）。トランプの経済政策についての所見ですけど、私は、あと4年の任期ですが最初の2年で多分、このバイデン政権の4年間の不正、或いは非常識を常識に戻すことに多分、徹頭徹尾、集中するんだろうなと」

水島「うん」

長尾「それはFRBの件もそうだし、CIAやFBIや、あとUSAIDの件も、全部、含めて、これは日本の民主党政権がやっていた事業仕分けなんていうものとは全く次元の違う、ええ、データが全部、こちら側が持っている」

水島「うん」

長尾「民主党政権は民主党がデータを持っていませんでしたからね（笑）、もう、きっちりと然るべきところに手を入れることが出来ずに終わった訳ですけど」

水島「うん」

長尾「やはり、そういう中で、僕は米国が常識を取り戻して、世界も、この4年間、ポロポロにされたものを取り戻して、さあ、経済を立て直していきましょうという順序だてなのかなと。ですから本格的なことが今、始まっているとは、僕は実は思っていないくて暫く先に、もっと大きな波が来るんじゃないかなと」

水島「うん」

長尾「関税についてですけど、やっぱり不法移民やフェンタニルの件でカナダとメキシコに、ああいう形、コロンビアにもやっていましたよね。結局、対応しますって言ったら、延長しますっていう形で、なるほどトランプらしい対応ですから」

水島「はい、そういう状況ですよ」

長尾「ええ。安倍さんが亡くなって、後に安倍晋三回顧録に出て来た、所謂、自動車のことについてもね、本当にオバマを連れ出してね、銀座の道に出たかどうか判りませんが、米国の車が売れないのは、燃費が悪いし、見てみると、全部、左ハンドルばかりだろうと。どうして、みんな、右ハンドル、こういう工夫が無いから、米国車は売れないんだってというようなやり取り。つまり、こういうことを、ちゃんと打ち返せる政権下で言うと、今、残念ながらクエスチョンがつく、それこそ決め打ちで、本当にどうするんだろうと」

水島「うん、そうですね」

長尾「その辺り日米共同記者会見の終わり方に表われていましたよね。ええ」

水島「それは、是非ね、我々も、それを言ったんだけどね」

長尾「ええ」

水島「あの終わり方、ちょっと変ですよ」

長尾「絶対、おかしいですよ」

水島「うん」

長尾「ただ石破さんに質問した記者は、じゃあ、米国が関税をかけたら、どうするんですかっていう質問だったですよ」

水島「うん」

長尾「そうすると仮の答えには答えないと。だけど、その前に同じ記者じゃないけれども、トランプに対して関税の質問をしている訳ですよ」

水島「うん」

長尾「そうしたら、トランプは、あの場で相互関税でやるっていうことを言っているのに、石破さんが、それに合わせた答えを言えばいいのに、まあ、あれは場が盛り上がって笑いが出た訳じゃなくて嘲り笑い、嘲笑の笑いでした」

水島「そうですね」

長尾「ええ」

水島「ああ、日本人だっていうねえ、うん」

長尾「カチーンときたか、まあ終始一貫、お互いに歯の浮くような、よいしょ合戦の日米首脳会談だったですよ。可もなく不可もなく、ええ、石破色を封印してくれたので、私は、そういう点では良かったなと思っているんですけどね」

水島「だけど、結構…（笑）、いや、その悪いことは解るけど。私は一応、映画やドラマの演出家なのでトランプの顔を見ると、ずっと馬鹿にしていましたよ」

長尾「ええ、そうですね」

水島「トランプは、この馬鹿っていう感じでしたよ」

長尾「ええ。石破さんがハンサムな訳がないじゃないですか」

水島「褒め方もね、グレートね、グレートなプライム・ミニスターになるだろうとかね」

長尾「はい」

水島「或いは、さっきの冗談ね」

長尾「はい」

水島「日本では、こういう答え方をしますなんて言うのは、なんだ、馬鹿みたいな、今、おっしゃる通りですよ」

長尾「だから、トランプは自分の意見を言っているんですよ」

水島「それから、最後にね…」

長尾「言っているのをスルーしちゃって、まあ、僕も英語は得意じゃないけれども大体、解りますよ。答えているのに…」

藤「あれ、長尾さん、何故、二番目に、あんなに無理やり早くあわせようとしたんですか」

長尾「いや、判らないです」

水島「ね」

藤「それ自体が全く意味がないと思うんですけど」

水島「本当にねえ、だから、長尾さんの指摘通りで、それと終わり方の表情をずうっと見ていると、151兆円を出すって言ったでしょ。でも、これも結構、曖昧な感じになって民間でどうなんだろうとかね、こういう感じのニュアンスがありましたよ」

藤「でも、あれ…」

水島「政府が出すとか言っている訳じゃないですよ」

藤「だって、あれも石破総理が言うべき数字かどうか問題ですよ」

水島「そうでしょう」

藤「純粹に民間の話ですから」

水島「それでトランプの方は、政府がそういうものを出すという風に一般的に聞いちゃうから」

長尾「ただ、基本的に言っちゃっているんでね」

藤「でも、それって、やっぱり中国共産党と同じだということになっちゃいますからね」

水島「いや、だから、結局、最後は握手もしないで去って行っちゃったでしょ」

長尾「普通ねえ、暫く会っていてモディ首相との…」

水島「抱き合って」

長尾「あの大変な終わり方、普通、ああですよ」

水島「いやあ…」

長尾「まあ、話を戻すと、やっぱり私はトランプ政権の経済政策に、日本がどれだけアグレッシブに決め打ちしないで（笑）、柔軟性を持って…」

水島「いや、そうですね」

長尾「まあ、悔しい表現ですが、不本意ながら、とにかく、しがみついていけるかどうかです。初動はということですよ」

水島「そう。全くそうだと思うね」

長尾「初動は」

水島「はい」

長尾「最後は、だって今、もう日本が、こんな状態なんで」

水島「うん」

長尾「ええ。残念ながら外圧でしか変われない国民性、民族性を持っているならば、それもやむなしですよ、ええ。ですから、今日は田中先生から、本当にいいワードを聞きました」

水島「うん」

長尾「決め打ちしないで、本当にどうにでも動けるようなことをやらないと…」

水島「う～ん。だから、それを今、指摘通りで、決め打ちしているっていうのは硬直性じゃないですか」

長尾「はい」

水島「つまりトランプが、こうきたら、こうね、いや、実は、私達もそう思っていたみたいなことを、本当はやらなきゃいけないですよ」

長尾「だから指示を受けているから、決め打ちになっちゃうんじゃないですか」

水島「そうなんですよ」

長尾「財務省なのか」

水島「そう。外務省なのかね」

長尾「というところですよ」

水島「うん」

長尾「どう考えたって、中国と何かやっていくんじゃないかっていう、そういうメッセージばかりですよ」

水島「いや、そうですよ。だから大喜びしていますよ。今言った反露的なね。トランプはロシアと仲よくしようって言っているのにね、それ、言っている訳ですからねえ。中国は本当に喜んでいていうのと、これ、かなり危険ですよ」

長尾「大変な分水嶺に来ていると思います」

水島「もし、訪中とかね、習近平を呼ぶとかね」

長尾「絶対、駄目です。ええ」

水島「だから、みんなで反対しなきゃいけないんだけども（失笑）」

長尾「訪中したらねえ、今度、また来ますからね」

水島「そうですよ。天皇陛下にも会わなきゃいけないでしょ」

長尾「取り敢えず、あんなのに握手させちゃ、絶対、駄目ですよ」

水島「(笑)」

長尾「前はコロナが取り敢えず防いでくれましたけどね。絶対、行っちゃ駄目です」

水島「まあ、そういう状況があるということは、我々の国の危険ですね。では鈴木さん、いいですか」

鈴木「はい。トランプ政権のアメリカ第一って凄く素晴らしいと思うんですよ」

水島「うん」

鈴木「物凄くいいことをしているなと思うんですけども、ただ、そのアメリカ第一主義、アメリカ・ファーストでやると、今、トランプ政権が何をやっているかって言うと、途上国の切り捨てですね。それこそパリ協定から再離脱するとか、あと国連の支援金を減らすとか、USAIDっていうのは、まあ、国際支援ですけど、あれも全部、断ち切ってしまうと。人道支援も切ってしまう。アフリカに対してもパワー・アフリカっていうアフリカ全土に電力を供給するっていうアメリカが支援をしていたプロジェクトも全部、切ってしまった訳です」

水島「はい」

鈴木「教育支援も切ってしまった」

水島「うん」

鈴木「要するに、今迄、アメリカが支援していた途上国の援助を一切合切、全部、切ってしまうんですよ」

水島「うん」

鈴木「そうすると、何が起こるかと言うと、今、途上国っていうのは、何とか、そういう支援で成長して来たんですけども、アメリカ第一で途上国を切ることによって、途上国そのものが地盤沈下する訳ですよ。そうすると、今、トランプさんはロシア・ウクライナの戦争を終わらせる。パレスチナとハマスの戦争も終わらせる。そうすると戦争が無くなって良かったね、みたいな世界になると、みんなは思っているんですけど、そうじゃなく

て、その戦争は終わるかもしれないけども、トランプさんが海外支援を本当に全部、打ち切っていくとなると、この2年後、3年後、どうなるかって言うと途上国が物凄く荒廃した状態になっていく訳ですよ。そうすると、そこで何が起きるかって言うと、内戦が起きる可能性もあるし、戦争が起きる可能性もあるし、パンデミックが起きる。パンデミックと言ってもコロナだけじゃなくて、例えば、インフルエンザが物凄く流行したり、あと性病、淋病、梅毒とか、そういったのも物凄く広がって来る」

水島「ねえ、エボラとか何かねえ、はい」

鈴木「それで、あと貧困も、かなり強烈な貧困が来ると思うんですよ」

水島「うん」

鈴木「途上国がそういう状況になったとすると、新興国全体が駄目になって来る訳ですから、グローバル経済そのものも多分、立ち行かなくなって来ると思うんですね」

水島「うん」

鈴木「そうすると先程、藤先生がおっしゃったように恐らく金融システムの方も、かなりダメージが来るんじゃないかという風に思っています」

水島「はい」

鈴木「だからトランプが今、やっているアメリカ第一っていうのは、アメリカそのものはいいかもしれないけども、アメリカ以外の国に対しては物凄く強烈に…」

水島「厳しい」

鈴木「逆風になってきているので、だから、場合によっては全て裏目に出て来てしまう。途上国が駄目になることによって、日本も駄目になると思います。そういうことによって、世界中は駄目になることでアメリカ一国だけが繁栄出来るわけがない訳で、だからアメリカ自身も駄目になってしまう。だから、今、やっているアメリカ第一主義もあまりにも極端にやり過ぎると、これから3年、4年後は恐らく今とは想像つかないような、結構、悲惨なことになっているんじゃないかなという風に思いますね」

水島「はい。今、丁度、言ってくれたので、アメリカの政府の効率化局が1週間ぐらい前までにやりましたと。970万ドル、230万、3千200万ドルとか、カンボジア、ブラハ、ジェンダー、セルビア、選挙におけるプログラムってコンソーシアムとかね。モルドバ、今、丁度、アフリカとか色々言っていましたけど、こういうものを全部、カットしましたと。これは相当な額ですよ」

鈴木「そうですね」

水島「こういうものが、この中にリベリアとかネパール、バングラデュ、インド、マリ、これは南アフリカ、こういうね、今言ったアフリカのそういった途上国の援助っていうのが、まあ、色々情報工作のあれもあるかも分かりませんが、今言ったように、この今の一覧表だと大分カットされていますね。まあ、これも、ちょっと参考にして…」

長尾「それ、本体予算がね、今のところ正式にデータが出ていないのでXしか読んでいないので、いや、Xに書いたっていうのは…」

水島「いや、これはイーロン・マスク、DOGEっていうドゥッジっていうのかな」

長尾「これ、大変な話ですからね」

藤「だから、今、機密情報に相当、アクセス出来ていますからね」

一同「うん」

長尾「ええ、ええ。それで、崇高な1960年にできたUSAIDの理念を、今、鈴木さんがおっしゃった全部、やめるっていう話じゃなくて、全体の内のほんの少ししか、そういったところに行き渡っていないから一旦、資金は止めるよと。

さっき水島社長が縷々お話しされた部分もあれは本体なのか全体なのか、ちょっと判らな

いですけど、例えば福祉政策って言ったって、テロリスト集団は現地で必ず福祉政策やっていますからね、ええ。もうお父さん、お母さんが亡くなった子供達の孤児院を創ってね、最終的には彼らをテロリストに育てる訳ですよ」

水島「はい」

長尾「でも、その福祉政策っていう部分に果たして投ずることが良いのか悪いのかっていうようなところも、もう一回、精査するっていうね」

藤「ただUSAIDって、あまり日本では言われていませんけど、アメリカのネオコンのレジーム・チェンジの切駒だったんですね」

長尾「まあ、CNNのフロント団体ですね」

藤「うん。だからウクライナの中に10年以上、物凄く金が行っていますからね」

水島「そうですね」

藤「うん」

水島「51兆円の内、58%しか行っていないって、ゼレンスキーが言っているっていうねえ。他は何処へ行ったっていうね」

藤「うん。だから2010年のマイダン革命もそうですし、カラー革命から、ずう~っと金を出していますから」

長尾「そう。そうなんだ」

水島「物凄い金だな」

藤「だからトランプさんがロシアと融和するって言ったら当然、USAIDは廃止っていうか大幅リストラっていうのは当然の流れではありますけどね」

水島「USAIDは280人しか残さないって言っているでしょ。まあ、マスクをずうっと注目しているんだけど、これは何だか分かりますか。社会保障データベース、これは、マスクの発表ですけど、全部、嘘だったと。これは社会保障を受け取っている人の人数、例えば38,825,456人っていうところから、ずうっとゼロ歳から9歳とある訳だけど」

長尾「220歳以上が1千人以上も居るんです」

藤「ああ、そうなんだ」

長尾「そんな長寿大国だったかなあと思って」

藤「消えた年金問題と同じですね」

水島「これ、230歳を…」

長尾「あっ、米国が創られる以前から数字が入っているっていう事です」

水島「つまり、こういう形で、もう死んじやった奴もずうっと生きて社会保障を貰っていた」

藤「そう。日本でも一時期、ありましたよね」

長尾「いや、こんなひどくない(笑)」

藤「(笑)」

水島「だからマスクは、こういうのを出すのが上手いから、こんな酷いんですよというね。お金が無駄になっているっていうのを参考にして下さい。一応、こういうような形でどんどん出しているっていうね。これは情報公開っていう形で、民意を引き付けようとしているっていうね、良い悪いは別としてね」

藤「でも前から言いますように、これは物凄い緊縮財政になりますから」

水島「うん。そうなんだ」

藤「会田さんがおっしゃっている日本も真っ青になるぐらい、アメリカは緊縮財政になりますから」

水島「だから、その状態っていうのがアメリカの財政赤字の問題でプラスになるのかどうか、でも本体を潰しちゃうんじゃないかっていうね。アメリカ全体の経済をとということもあるので、今の鈴木さんからの提案は、色々問題っていうのは凄くあると思います。では会田さん、お願いします」

会田「はい。まず日銀からお話をしますと、スタグフレーションというのがあります。物価の上昇と景気の悪化が同居してしまう場合、この場合に利下げ、金融緩和が出来るのは、FRBだということです」

水島「うん」

会田「理由は、FRBは組織の目的、責務として物価の安定と雇用の最大化っていう二重の責務を課されていると。スタグフレーションで物価が上がったとしても、雇用の悪化が著しかった場合には利下げが出来るっていうのが、FRBの建て付けだということです」

水島「うん、ああ、そういうことか」

会田「これは理論的に正しくて、スタグフレーションというのは、供給が足りない、投資が足りないことによって起こるんだとすれば、投資を拡大する為には当然、金利っていうのは、あまり高いと問題があるのでスタグフレーションで緩和をするっていうのは決して間違った処方箋でもなく、そういう状況がフレキシブルに行えるような建て付けになっているのがFRBです」

水島「うん」

会田「ただ日銀の場合、問題がありまして、日銀法で日銀が責務を課されているのは、金融システムの安定と物価の安定だけです。ということは雇用の最大化という問題は無い」

水島「無いんだ。うん」

会田「金融システムが崩れていく程、景気が悪化する、あのリーマンショック、ああいうことになれば当然、物価を無視して止めに行くかもしれませんけれども、雇用の最大化という責務が直接的には入っていないということです。ただ日銀法を作った人は、その問題も、ある程度、解っていたようで、こういう文章がもう一つあります。『金融政策というのは経済政策の一環を為すものなので政府の経済政策の方針と整合的になるように連絡を密にしてやりなさい』と。政府は雇用の最大化が目的に決まっている訳です」

水島「うん」

会田「景気は出来るだけ良くしておこうっていうのは政府の目的であるのが当たり前で、今であればデフレを完全に脱却して成長が出来る、賃金が上昇するという目的に向って、政府が経済政策の方針を運営しているのであれば、日銀は、それをしっかり整合的であると考えれば、物価高だけで利上げをバンバン、バンバンして、いや、所謂、決め打ちで、利上げをしていくっていうことは出来ないはずですよ」

水島「うん」

会田「ただ問題なのは、日銀の中でも、どうやら、こういう解釈をしていそうだと」

水島「うん」

会田「政府と連絡さえ密にしておけば、結果論として経済政策の方針と整合的でなくともいいだろうと」

長尾「文章の通りですね」

会田「ええ。ええ、もう読み方です」

長尾「はい」

会田「普通に読めば、政府の経済政策の方針と整合的にやりなさいと」

長尾「魂を入れろという話ですね」

藤「(笑)」

会田「はい。ただ、連絡さえ密にしておけば、やっていますよ」

水島「アリバイというか」

会田「たまに植田さんが首相と会ったりしていますけれども、それだけしておけばいいだろうと思っている節があると。これが大きな問題だと思います」

水島「なるほどねえ。う～ん」

会田「これが日銀の悪化、決め打ちしてしまう理由です」

水島「なるほど」

会田「トランプの話ですけれども当然、各政治家、まあ政府というのは目的関数があると。これを最大にしたいという目的関数があると。通常、政府は当然、経済成長率であったり国民の所得の増加が最大の目的なはずですけれども、どうやらトランプ大統領は目的関数が貿易収支のようだ」と

水島「うん」

会田「この貿易収支の赤字を減らしたい黒字にしたい、ビジネスマンなのでマクロというよりはミクロの考え方で目的関数が違うと」

藤「それは間違いないですね」

会田「そうすると日本の対応の仕方というのは、トランプさんの目的関数を考えて対応しなきゃいけない。とすると日本としてはウィンウィンになる可能性は充分ある訳です」

水島「うん」

会田「理由は、アメリカの貿易収支を改善させる為には、アメリカの輸出を増やさなきゃいけない。日本は輸入を増やさなきゃいけない。となれば、当然、日本は内需を大拡大しますと」

水島「うん」

会田「日本は内需が弱かったのがアメリカの製品、サービスは輸入できなかったけれども…」

水島「うん、買えなかったと」

会田「これからは、とにかく内需を拡大するのでアメリカとの貿易収支は改善するでしょうという方向に行けば、日本は内需が拡大してウィンですし、アメリカも貿易収支が改善してウィンなので、何も悪い事が無いはずな訳です」

水島「うん」

会田「そうすると今回の減税ってチャンスでして、もし減税を大幅にやって日本の国民の生活を向上させ内需を拡大するっていうコミットメントが出来れば当然、過去に無い最大規模の減税をやりましたと言って、トランプさんに対しては当然、トランプさんの言っていることは解りますよっていうことが出来た訳です。

ですから未だ、そこは何とかして欲しいっていうことと、一つ、私が心配しているのは、毎年6月の政府の骨太の方針です。今年、プライマリー・バランスの黒字化目標をどうするのかどうか、期限をどうするのかっていうことが本格的に議論されます。ここでプライマリー・バランスの黒字化を早急に目指すっていうことをやってしまうと、これは内需を冷やしますっていうことと同じなので、トランプ政権へのメッセージとしては、トランプさんの言っている事は聞きませんって言っている事なので当然、関税に繋がり易い訳です」

水島「そうだよな」

会田「やはり、そこで財政の考え方を変えましたと。日本の内需を拡大して、貿易不均衡も是正出来るような形に変えましたとアピールしていけば当然、トランプ政権としても悪くはない訳です」

水島「それは解りますからね」

会田「はい。まあ、そういう戦略的でウィンウィンになることを、もう少し合理的に考えていく。そうなると日銀も同じで、内需を冷やしますので利上げしちゃいけない訳です」

水島「うん」

会田「日銀も出来るだけ金融緩和で引っ張って、とにかく政府と日銀は経済政策の方針を整合的に一貫して内需を拡大して、トランプさんの言っている事は解ります、協力しますと言って、ウィンウィンに持ち込むのが一番、いい戦略じゃないかと思います」

長尾「減税で内需の話をするれば、関税の交渉にもなるし」

会田「なるということです」

長尾「ええ。安倍さんも同じ…」

水島「それと付加価値税としての消費税をゼロにすれば、それも関税のあれになっているから」

長尾「言いましたね」

水島「一挙両得じゃないですか」

会田「ああ、一挙両得です、はい」

水島「ねえ」

会田「一挙両得です」

水島「減税と、今言ったねえ、やれば出来るっていうことですか」

藤「でも財務省は90年代に前例があるんですよ」

水島「はい」

藤「だからアメリカと貿易協議をやっている時に、公共投資100兆円というのを打ち出したんですよ」

水島「うん」

藤「前は公共投資でしたけど」

水島「うん」

藤「それ、やっぱり財務省、大蔵省は知っているから絶対、二度の失敗はしないと。で、むしろ私が考えるのは多分、今、トヨタとかは未だ百何万台をどんどん輸出しているじゃないですか」

水島「うん」

藤「どんどんアメリカに小売りを移せという産業空洞化が、多分、起きちゃうんじゃないかっていう懸念があって」

水島「ああ、日本の？」

藤「ええ」

水島「はい。そりゃそうでしょうね」

藤「だから、しかも、その公共投資の90年代と全く同じ話なので、非常に正しい戦略なんだけど、一回、やっている話なので多分、財務省は騙されないでしょうね」

水島「トヨタとか、ああいうのはメキシコとかに自動車工場を創っているでしょ」

藤「うん。でも、未だ百何万台とか」

水島「ああ、未だ…」

藤「だからトヨタとか、もう一つホンダが大分、減って少ないんですけど、トヨタは未だ物凄く輸出しているんですよ」

水島「輸出が多いんだ。ああ、関税かけられますよね」

藤「だから、どんどん、もう現地の工場を創れという話になっちゃう懸念の方が高いですよええ」

水島「そうだよね」

松田「財務省は騙されないかもしれませんが、これは、やはり政治家がきちんとリーダーシップとらなきゃいけないんですが、さっき、おっしゃったように、アメリカは今、小さな政府をやる訳ですね」

水島「はい、そうですね」

松田「そうするとアメリカは、緊縮になるとすれば、日本がそれを補うだけの拡大をしてバランスをとっていくと」

水島「ああ…」

松田「そういうのが整合的になるのは間違いないことで…」

水島「なっちゃうんですね」

松田「もう日本が、さっき言ったように対外純資産高、世界一ですから、日本がその役割を果たすということをししないと、世界経済はおかしくなるという論理だと思いますけどね。うん」

水島「まあ、そういう意味ではねえ、その硬直性が非常に心配ですね（失笑）。さっきね、田中さんが言った日銀の決め打ち総裁が居たって、もっとね、本当に…」

長尾「周りを見ていないって言うことですよ」

水島「でしょ」

長尾「ああ」

水島「うん」

長尾「頭の中で考えて結論を出しちゃっている」

松田「だから日銀もね、中央銀行が、みんな、間違っているなあと思うのは、今のインフレって勿論、アメリカの場合は需要面もあるし供給面もあるんですが、日本の場合、供給面から起こっているインフレで、供給面から起こっているインフレを、需要を引き締める方向の金融政策で抑えるって言うこと自体が…」

水島「うん。矛盾していますね」

松田「元々意味が無いって言いますかね、原因が全く違うということですよ。それから日銀は物価高だけを考えるという風になっているので、今は円安になっていると」

水島「うん」

松田「それで物価高になっているということで動いちゃっているんですが、しかし、これも為替レートって、いつも財務省が言っているのは、その通りだと思う。ファンダメンタルズは反映して決まるもので、日本経済がファンダメンタルズを良くすることを先に考えるべきであって、為替ってというのは、その結果で決まるものだという風に考えて、日銀が余計なことをしないで、金利を上げないで、そのままにしておけば市場にも変な思惑を与えませんしね、そうすべきだったのに何か非常に間違ってしまったなど。完全に組織の論理と言いますかね、それで突っ走っちゃっているように感じますね」

田中「それとか今の日銀の公式的な見解をそのままに受けると、植田さんは今の物価上昇というのが当分、続くんじゃないかなって言うことで利上げのスタンスを肯定化していますよね」

水島「うん」

田中「でも日本の物価上昇は今、何が齎しているかって言うと、3つ要因があると思うんですよ」

水島「うん」

田中「一つはエネルギー関係で、残り二つは、お米と生鮮野菜ですよ。キャベツだとかレタスだとか。エネルギー問題も、さっき前半で言ったんで置いておいて、残りの二つの

お米と生鮮野菜。それを防ぐ為に利上げするというのは、簡単に言うと、みんなの財布の紐を固くして、つまり物を買えないような環境にして、物価を下げないと、お米や野菜の価格は下がらないと思うんですよ」

水島「うん」

田中「投げ売りみたいな形を望んでいる訳ですから。それって簡単に言うと、発狂した路線ですよねえ（笑）」

一同「（失笑）」

田中「まあ、そうですね。どう考えても、おかしいんですよ。で、それをやっている。で、えー、残念なのは、あのう、これねえ、えー、減税阻止グループと似ているんですけど…」

水島「うん」

田中「やっぱり今の日銀の政策に理解のある人達っていうのは東大の法学部、経済学部卒の経済学者、エコノミスト、或いは、官僚達、マスコミ陣、そういった人達ですよ」

水島「うん」

田中「僕ねえ、やっぱり財務省の悪人論って一定の抑制は必要だと思うんだけど、かなり当たっていて、全員、今、仲間ですよ。最近東大のトップ層はコンサルなんかに行っちゃって、あまり財務省には行かないけど、今の40、50の人達っていうのは、やはり未だ財務省中心で考えているような官僚優位で考えているような人達が、東大から行っている訳ですよ」

水島「うん」

田中「東大の人達って、簡単に言うと、僕なんかは実は昔、そうだったんだけど、早稲田の政経って変節的に言えば出来損ないの東大みたいな感じですよ。そこに居ると、自分達の就職って自分達の能力で決まっていると思っっているんですよ。だから景気の良い悪いというのは、先生達もそうだし学生達もあまり身近なものとして全然考えない訳ですよ」

水島「うんうん…」

田中「ましてや東大はね、言わずもがなですよ。だから、そういったトップ校の人達、それを教えている先生達、植田さんもですけど、そういった人達は、やはり、普通の一般的なね、もう九十何パーセント以上の国民の生活っていうのを、あまり身近に、例えば自分達の学生が景気の良し悪しで就職が難しいとか良くなるとかいうことを見ていれば、それが重要だっていうことに気づく訳ですよ」

水島「うんうん」

田中「でも、そういった環境にない訳ですよ」

水島「うん」

田中「その人が残念ながら今の日銀総裁になって、それを応援している人達も、何故か、まあ、統計をとった訳じゃないですけど、私の感想ですけどね、明らかに東大閥なんですよ。申し訳ないけど、浜田先生ね、浜田幸一先生のことを尊敬はしていますよ。でも、浜田先生は植田さんになってから一貫して植田推しですよ。それは明らかに矛盾していますよ」

水島「うん」

田中「だって浜田先生の最近の論説、第一次石油ショックの前夜みたいだとか言っていて、そんな感じは全く無いから。僕は経験者ですから解っていますけど、皆さんの大半もそうですね」

水島「うん」

田中「今、第一次石油ショックの前みたいな狂乱物価、そこには、まず理由が違うじゃな

いですか」

水島「全然、違うね」

田中「ええ」

水島「うん」

田中「お米が採れないのはOPECのせいですか。違いますよねえ（笑）、全く違う状況なのに、そういったものを持ち出すのはどうなのかなあと思うんですよね」

水島「何か現実感覚が無いんだ」

田中「そうです。だから身内びいきになっちゃっている」

水島「う～ん…」

田中「それは、やっぱり官僚精神。官僚の人達、優秀な方も居ますが、やっぱりねえ、外交もそうだし、この間の石破・トランプ外交を見てもね、官僚がお膳立てした通りのことを言っていますよね」

水島「うん」

田中「あれは見方によっては、硬直的なことをやっている訳ですよ」

水島「うん、全くそうだね」

田中「お互いにね。だから決め打ち外交、決め打ち政策」

水島「うん」

田中「全部、官僚が仕切っちゃって、政治の力を全く感じない」

水島「うん」

田中「僕は率直に言って、今の与党にしっかりして欲しいと思っているんですよ。どうしてかって、簡単に言うと他は雑魚キャラじゃないですか」

水島「うん」

田中「未だ。国民民主だって、明らかに、いきなり2倍、3倍になる訳がないですよ。そうになってしまうと、やっぱり今の与党が、ある程度、内部から変わってくれないと困るんですよ」

水島「うん」

田中「国民が困るんですよ。ええ。だから、そういう風に思っています」

水島「うん、でもねえ、やっぱり言う通りで、一番、解り易いのは、立憲の野田さんと石破総理とね、何処が変わっているんだっていうねえ、あの財政論も含めてね。はい、どうぞ」

会田「はい。前提を疑うということが、とても重要で、私はアメリカのリベラルアーツ、教養大学の出身で、自分の心地いいところから半歩、出ることを心掛けようって、ずっと教わる訳ですよ。我々は心地いいところっていうのは、我々は前提を持って物事を考えているので、心地いいところに留まっていると前提を疑えない訳ですね」

水島「うんうん」

会田「ただ心地いいところから、ふと外に出ると、前提を疑うことが出来るので、まあ、財務省、日銀の方々が考えている前提を疑って、それが本当に正しいのかっていう疑問に至ることが出来ると思います。

例えば、私はアメリカの大学で国際政治を取った時に、第二次世界大戦の話になって、またアメリカの論理を押し付けられるのかと恐々としていたら、今回は日本側から物事を考えてみようという授業が進んだんでビックリしまして」

水島「おお」

会田「それぐらい前提を疑って、本当にその前提まで議論を遡って、考えていこうという教育っていうのは、やっぱり根付いている訳です」

水島「うん」

会田「ところが、やっぱり財政は黒字でなきゃいけないとか、金利は上げたら勝ちだとか、やはり、そういう前提自体を疑う精神がないと、物事を柔軟に考えられないじゃないかと思います」

水島「うん」

田中「そうねえ、だから自分の心地いいところっていうのは、日本の風土で言うとお仲間、学閥、或いは、組織閥みたいなものがあって、そこから一步、出なきゃいけないですよ」

会田「はい」

田中「あれは、やっぱり国民の声を聞くって、まあ、ネットって歪んでいるけど、それでもね、余程、色んな声が聞こえて、まあ、話を戻しますけど、だから、高市さんは本当に今のネットの声を真剣に聞いた方がいいと思いますね。本当に危機的な状況だと思いますよ」

水島「そうね、やっぱり政界だけで考えるよりも、本当にそういうことだと思いますね」

藤「でも参議院選挙では、また立憲民主が入っちゃうんでしょう？益々地獄になりませんか」

一同「(苦笑)」

水島「でもねえ、申し訳ないけど(失笑)、自民党に今、入れようという雰囲気は、あまり、実は、私は色んな人に会うから判るけど、そこは本当に、もっと危機的に、長尾さんの方が一番、感じていると思うけど。それが無いんじゃないか、高市さんが未だ、そういう状態で居るのもね、ウクライナとかいうのも、本当に、これが駄目だったら党を解党しても、小泉みたいな言い方で、党をぶっ壊しても私は自民党を立て直したいとか、一旦、解党してもやるぐらいっていうぐらいのね、それで国民を救いたいというのが最優先だと。自民党の再生の道は、そっちのみだみたいな形ぐらいで思い切ってパフォーマンスをやらないと、全体の雰囲気が、いや、一部の人はね、保守の中では希望の星みたいなことを言っているけれども、もう今、中へ入っちゃっているからね。

ネットの雰囲気を見るとねえ、まあ、そういう熱さを、あまり感じない状態になっているから、もう一回、余計なお世話か分からないけど、そういう感じがあるのと、それと鈴木さんね、いつも、こういう所に出てくれると、こういう、所謂、大所高所の経済論と違って、この間はト一横キッズとかね、こういうところが、暴力団とか若い人達がこの間、タイの国境でこき使われているとかね、こういうことがあるじゃないですか。

50%以上が選挙に行かないっていうのは、それは行った方がいいっていうのは、我々は言えるけども行く気も無いというね、もう、そこまで来ちゃっているところがあるんだよね。ちょっと自分の、うん」

鈴木「今、若い人達に二つの闇があるんですね」

水島「うん」

鈴木「一つの闇っていうのは心が病む、病気の闇ですね」

水島「うん」

鈴木「もう一つの闇っていうのは暗闇の闇ですよ」

水島「うん」

鈴木「病気の闇っていうのは、ト一横キッズなどがやっている Over Dose だとか List Cut とか。あとは大久保公園に立って…」

水島「立っていますね」

鈴木「売っちゃいけないものを売ったりしていますけど、そういう心の闇ですよ」

水島「うん」

鈴木「もう一つの闇っていうのが、要するに闇バイトとか…」

水島「ああ、そうですね」

鈴木「ああいう闇の組織に囚われて、そこで一発逆転の金稼ぎをしよう。強盗をやって」

水島「人の家まで行ってね、うん」

鈴木「強盗をやって。普通に働いたら1日1万円とかそんなもんです。強盗を一回やると50万円、100万円、出る訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「だから今の若者って心の闇と社会の闇、この二つの闇に囚われて行っている訳ですね。今、ミャンマーの所で捕まった、まあ、捕獲されたって言うべきか、あれねえ、あそこに何千人も居るんですよ」

水島「そうみたいですねえ」

鈴木「はい。彼らは台湾人も結構、多いですけど、台湾人なんかは、お金儲けで捉われる訳ですね」

水島「うん」

鈴木「日本人の若者が何故、あそこに行ったのかと言うと、海外に行ったらいいバイトがあるよと、騙されて行く訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「それで連れ回されてミャンマーに連れて行かれて」

長尾「やっぱりバイトで行くんですか」

鈴木「はい」

長尾「闇バイトに」

鈴木「はい」

長尾「それで態々行くんだ」

鈴木「そうです」

長尾「はあ〜…」

鈴木「態々行って監禁される訳です。監禁されて逃げようと思ったら拷問されて」

水島「中国みたいなことを言っていたねえ」

鈴木「はい。社会の底辺が今、もう、そういう状況になって来ている訳ですね。何故、そういう状況になったのかと言うと、やはり日本が30年間、もう成長出来ない国になってしまった。もう非正規雇用も2000年代からどんどん増えていって這い上がることが出来ない状況になってしまった。そういう状況の中で普通にやっていたら、もうジリ貧になるばかりですよ。ね。

だから、もう、ここ一発逆転でFXだ、投資だ、暗号通貨だ、闇バイトだって行っちゃう訳ですよ」

水島「ああ、そうだねえ」

鈴木「女の子は女の子で、じゃあ、もう何をやっても駄目だから、じゃあ、大久保公園に立とうかとか、あとは稼いだお金を全部、ホストに使っちゃうとか」

水島「うん」

鈴木「もう、そういう世界になって来ている訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「だから、もう荒れている訳ですよ。要するに今の日本の政治がやってきた30年のツケを、彼らが払っている訳ですよ。でも、そういう状況の中で、じゃあ、今、日本の政治は何を議題にするかって言うと、103万円の壁だとか高校を無償化するとか、夫

婦の名前をどうするかだとか、そんな、みみっちいことしかやっていない訳ですよ」

水島「ほんと、そうだね」

鈴木「こんなことで、じゃあ、日本が良くなるのかって言ったら良くなる訳が無いじゃないですか」

水島「うん」

鈴木「20代、30代の方は、もう解っているんですよ」

水島「うん」

鈴木「自民党なんか支援しても、もう駄目だっていうのは、もう今の状況じゃ駄目だと。彼らで唯一政治に詳しい人は、れいわを支持していますよ」

水島「れいわ新選組ね」

鈴木「はい。パフォーマンスも強いし、メッセージが響いていますよね」

藤「どういうメッセージが響いているんですか」

鈴木「減税ですよ」

藤「ああ、やっぱりね」

水島「消費税ゼロね」

藤「ああ〜」

鈴木「減税です。だから、そういった減税で若者を取り込んで来ている訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「それで、一方、石破政権を見ると、もう本当に自民党内そのものも纏めきれてない状況だし、あとね、その103万円がどうこう、どうこうって、そのう（笑）、そんなことばかり言っていて、その活力も全然、見えて来ない」

水島「うん」

鈴木「あと国際的にも、本当に日本の立場をきちんと主張してくれているのかと言うと、全然、主張してくれていないと」

水島「うん」

鈴木「要するに今の自民党って、もう駄目だな、つまらないな、そういう状況にある訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「だから誰も選挙に行かない訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「うん」

水島「今言ったことは凄く大事な話でね、やっぱり50%以上が行かないのと、つまらないんですよ」

鈴木「そうですね」

水島「れいわの山本太郎っていう人を、私が脚本監督したドラマの主演で使ったことがあるのね」

鈴木「うん」

水島「凄く真面目で一生懸命な子。彼の演説を一回、二回、見たことあるんですよ」

鈴木「うんうん」

水島「役者だから、100か所、同じ調子で」

藤「なるほどね」

水島「涙を流して」、

藤「得意ですねえ」

水島「ね。普通は、いくらベテランの長尾さんでも同じことは中々出来ないでしょ」

長尾「はい、同じことはね」

水島「でも山本太郎は出来るんです」

藤「さすがだな」

水島「本当に自分を盛り上げて目に涙を溜めて、東京でも大阪でも九州でも北海道でも同じことがやれる。それで、みんなは感動する訳です。つまり一番、欲しいものは、お金も欲しいけども、そういう生きていて自然に涙が流れるような感動みたいなのが欲しいんですよ。今、自民党の中で、だから高市さんに、もし期待するとしたら、そういうものを若い人に与えられると、思い切って身を捨ててこそと言うのは、山本太郎さんが良い悪いじゃなくて、そういうことをやれるものがあるってということで、やっぱり若い人は多分、それを見た人達だと思う。山本太郎の姿を映像か生でね」

長尾「その映像がね、この間、ちょっと専門家の興味深い話を聞いて、何故、若手に政策が伝わっているとは考えられないんですよ。それは何かって言うと、携帯電話ですよ。私はTikTokを使いませんが、或いは、YouTubeのショート動画とかFacebookのrealだとかインスタだとか、ほんの5秒、10秒、演説の全体は大したことを言っていないのに、そこのところだけ格好良くやると」

藤「切り抜き動画ですね」

長尾「ええ」

水島「そうですよ」

長尾「ある機関が調査したところ、朝から晩まで、ずうっとreal観ている若者って結構、多いらしいですよ」

水島「それもねえ…」

長尾「眺めているだけで」

水島「短い時間でね」

長尾「それに、れいわ新選組さんがやっていらっしゃるかは知りませんが、そこでスポットでちゃんと広告を打っているってところで、まあ、やっぱり…」

水島「そういうの、あるよね、はい」

長尾「兵庫県の斎藤さんだとか、あと石丸さんも、もう信じられないぐらいの金額のYouTube広告を打っていますんでね」

水島「うん」

長尾「まあ、そういう側面もあるのかなあと」

水島「いや、それは凄く冷徹にねえ、あのれいわ新選組というのは、そこを持っているんですよ。それから例えばね、よくYouTubeで、うちの番組にもスポンサーみたいな色んなものが入って来るけど、今、焚書になっていた本が間もなく削除されるかも分からないから、今の内にというね」

長尾「なるほど」

水島「そういうのは物凄く多い訳ですよ。本当は2900円のが今、1200円でお分けしますってね、間もなく削除、あまりにも内容が過激な為にね、とかって」

一同「(笑)」

水島「あれは本当にね、完璧に保守商売みたいなものも凄くあるんでね」

長尾「これは、もう二度と出て来ませんかね」

水島「そうそう、そう。というようなことを、まあ、うちも今、考えると、ああいうのは昔からやっていた、違うかも分かんないと思うけど(笑)」

一同「(笑)」

水島「とにかく、そういうやり方、感動とか何かっていう、つまり理屈とか一番、解り易

いのは、彼らの消費税ゼロですよ」

一同「うん」

水島「他のところは、私、認めていないけど、消費税ゼロ、ああ、いいじゃないのと、ここは一緒だよ。だから変な話だけど、色んなね、参政党さんも含めて日本保守党とか何とか色々小さい政党も大きい政党も含めて、消費税ゼロ連合みたいなのを創って一挙に政権を全部、変えちゃおうじゃないかと。もう他は要らない。とにかく、やることは今迄の30年の財務省の財政政策を変える政府をみんなで創っちゃって、あとは党名もあれも全部、残して全国区で大量の人が出るような形のことを考えないと、もう間に合わなくなるぞというようなことを思っているんですよ。

もう減税連合だけでもいいかも分からない。それで、そこに減税連合何とか党とかいうようなことまで、ちょっと切羽詰まったことをやらないと、この小選挙区で変えることは、無理ですよ。100%、現状維持の一人二人は当選するかも分かんないけども、参政党が前にやった時、180万票ぐらい取りましたよね」

藤「うん」

水島「それで、結局、一人でしょ。それから日本保守党の愛知の小選挙区は、やはり河村さんの影響ですよ」

藤「うん、なるほどね」

水島「それで、島田さんが全国区で一人、通ったって言うけど、つまり、そのぐらいしか出来ないですよ。だけど、そういう形でも自民党は、全国区15万人から居るだけで当選するっていうのは、全国で全部、出しているから、その総合票でやれるっていうことがあるんでねえ。もう日本の小選挙区は永久に戦後体制を守っちゃう可能性があるから、それで、もう一つは若い人達に、あんた達、50%で本当に変わるよと。それ、れいわも入れていいんですよ、もし、あれだったら国民民主党だって、みんな、入っていい。

とにかく何をやるかって言うと減税をやる。財政政策を転換させるっていうようなことを思い切ってやるぐらいのことをやらないと、今回、もうトランプの、こういう何をするか判らないというね、変な言い方だけど、ついていけなくなると思いますね」

藤「最低限、緊縮財政をやることは間違いないので」

水島「そうなんだ、それは間違いないね」

藤「だから、松田さんもおっしゃったように日本が本当に、それを補うような形になればいいんですけど、私が見ていると、多分、財務省がそれを奇貨として、日本も緊縮だって言うんじゃないかと思って」

水島「そう、そっちの方が可能性あるよ」

松田「財務省を抑え込む政権を創らなきゃ駄目です」

藤「(頷く)」

水島「はい。というようなこともあるんでね、この経済っていうのは、もっと、皆さんで議論したいけど、でも今日、皆さんのお話を伺ってみると、会田さんねえ、何とかすれば何とかかなるようなね(笑)」

会田「はい」

水島「本当にちゃんとやれば日本だって、まだまだ可能性があるっていうね。日銀の硬直性とか石破内閣の硬直性とか色々あるけれども、本当に、きちっと、みんなでやれば出来ないことはないかも分からない。これは危機がチャンスになるかも分からないと前向きに考えたいと思うんでね。最後に皆さんから一言ずつ載って終えたいと思います。じゃあ、松田さんからお願いします」

松田「そうですね。今日は日本は幸せになるかということなので、幸せになる道につい

て、少し考えたいと思いますが、まず、政治家と官僚の関係ですけども、私も両方やったので、よく解るんですが、やっぱり官僚と仲良くしていると政治家って仕事をし易いんですよね」

水島「ああ、そりゃそうだろうねえ」

松田「そうすると、やっぱり、この省庁に同情的になって来て、この省庁の役人から良く思われているというのが心地良くなるんですよね。そうすると結局、官僚の手の平に乗ってしまう政治家が大半ではないかなあという風に思いますから」

水島「ああ、ああ」

松田「これは官僚を超えられる政治家が本当に出て来なきゃいけないんですね」

水島「そうだねえ」

松田「そうになると、やっぱり各政治家に、それなりの体制を創る、まあねえ、本当の意味での政策秘書とか、或いはシンクタンクがそんなことをやらないと、とてもじゃないけど官僚機構に政治家は対抗できないと思いますね。ただ、そういった意味で、私は官僚出身なので一応、解っているので、だから何を騙しているかも分かるので、まあ、それね、少しはお役に立てるかもしれないなと思っているんですが」

水島「はい。そうですね」

松田「それから国民は、そういう政治家を選んで行かなきゃいけないですよ。それからトランプ時代になった時にはトランプ政権がこうだから、こうだって言うんじゃないで、やっぱり日本は全く独自の価値を出していかなきゃいけないと思いますね。

トランプの方から、ああ、日本って付き合ったら中々いいじゃないかと思わせるものを、どれだけ生み出すかっていうことにかかっていると思いますし、それから多分、安全保障も自主防衛ということに行かざるを得ないと」

水島「うん」

松田「そういう時に、私は、さっき言った積極財政で自主防衛の為の技術開発投資って、日本はアメリカにとっても、かけがえのない部品も供給している訳ですから、そのところは、例えば核ミサイルが飛んで来たらね、もう自動的に撃ち落とすようなことも色々言われていますけれども、例えば、そういうところに巨額の投資を政府はやって行って、トランプから、ああ、これは一目置くと言われるものを自分でつくっていくことじゃないかと思いますが、それから、もう一つ、さっき言わなかったんですが、トランプ政権は、かなり、これから、もう急激に人類社会を変えるのは、やっぱりAGIだと思っています。人工知能が今、アメリカと中国がAGIで最終覇権戦争をやろうとしているという話もありますしね、これはパラダイム・チェンジって言うか、人類社会が始まって以来の、恐らく今迄は暗記型のAIが、これからは推論するようになって帰納法や演繹法が出来るようになって、今年は人間の知能を抜いてしまうという様な話が出来て、急激に進歩しているという流れの中で、でも、そうは言っても、それぞれの国のAIになると思うんですね。

先にAIを制した国が世界を制してしまうっていう中で、もし中国がシンギュラリティをとってしまうと、中国的価値観で世界は支配される。それは、我々が一番、避けなければいけないことです」

水島「そうですね」

松田「アメリカはアメリカで多分、日本的価値観でやろうとしているんじゃないかって言う人も居ますけれども、でもね、そのところでアメリカはアメリカでやる訳ですが、やっぱり日本は独自の日本的価値観での人工知能で最先端に行くようなことをやらないと、日本は人工知能に相当、遅れたらしくて、もう海外から人材を呼んで来て、ある人が言

っていましたが、今、東大の松尾先生のところが一番だから、本郷バレーを創ったらいいんだって、東大がとんでもないって話をしていますけど（笑）。

本郷バレーっていうのを創った方がいいんじゃないかという提案もあるんですね。そういうところに政府は年間10兆円ぐらいのお金をバア〜ンツとつぎ込んでいくという、その為に国債も発行してアメリカに回っているんだったら、これも回っているんだったら日本でもね、次を開いていくという、この情報技術の進歩っていうのは物凄い勢いなので、私はそちらの方でやっていかないと、それをやればエネルギー価格も下がりますし食糧価格も下がりますし、色んな意味で、将来的に言うと、人手不足の問題も解消されるし、物価高の問題も、それから社会保障、社会福祉の問題も人工知能付きロボットの投資とかで色々な事が出来ますので、移民も入れなくて済むようになるとか、そっちを早急にやるべきではないかということをお願いしておきたいと思います」

水島「そうですね。はい、有難うございます。では、藤さん」

藤「まあ、最後に今日一番言いたいことを申し上げたいんですけど、今日のお話を聞いて、やっぱり経済的には非常に正しい事をお聞きしたので勉強になったんですけど、やっぱり、この国ってシルバー・デモクラシーですよ」

水島「うんうん」

藤「だから高齢化率3割で実際、投票率が高いから、投票行動に於ける高齢者のウエイトって物凄くデカくて、私も内調時代に少し色々な選挙毎の、例えば、投票行動とか少し勉強させて貰ったんですけど、結構、団塊の世代の方の投票行動が強いんですよ」

水島「投票行動が」

藤「既存の与党に対して必ずお灸をすえて、毎回、変えるんです」

水島「うん」

藤「だから多分、今回の衆議院選挙も今度の参議院選挙も多分、また、前は裏金問題で今回は米を含めて物価高でしょ」

水島「うん」

藤「多分、お灸、すえるんですよ」

水島「うん。そうですね」

藤「だから自民党以上に緊縮財政を言っている立憲にいつっちゃうかもしれない」

水島「立憲、そうなんですか」

藤「だから、そういう破壊的な行動を執っているの、しかも、また高齢者っていうのは、やっぱり戦後のインフレを知っているし、だから、その財務省の新しい分が、こんなに借金が多かったらインフラになりますよと言った瞬間に財政拡大、反対。非常に簡単なプロパガンダで終わっちゃうんですよ。

何とか高齢者を味方に付ける、これは、もう会田さんからも教えて貰って勉強になっているんですけど、やっぱりコロナの時って拡張財政をやったんですよ」

水島「うん」

藤「コロナって、やっぱり一番、高齢者が恐れていましたから」

水島「うんうん」

藤「オッケーしたし、まあ、その中で、多分、財務省も空気を読んで、普通、財務省だったらあり得ないような、とんでもないばら撒き財政をした訳じゃないですか」

水島「やった訳ですね、はいはい」

藤「だから、やっぱり高齢者を味方に付ける。私は消費税減税は非常にいいと思うんですけど、それだけでは、この国の形は変わらないですよ」

水島「うん」

藤「さっき鈴木さんがおっしゃった二つ目の闇。多分、日本の経済は中世に戻っちゃった訳ですよ」

水島「うん」

藤「というのは、近代に入る前、戦国時代って、実は略奪が経済行為の普通なんですよ。だから普通に合法的な手でやっていたってマーケットに任せていたら、いつまで経っても我々は豊かになりませんと。一方でマスコミを見ていると、高齢者は、こんなに給与資産を持っていますと。だったら、そいつらから奪えばいいだろうと。殆ど良心の呵責もなく、そういうことをやってしまうというところで、まあ、なんだかんだ言って、実は本当は高齢者が癌な訳です。私も来年、高齢者になりますけど、その時に年金問題だって、皆さん、誰でも知っているんですけど、高齢者同士で豊かな人が貧しい人に分配すれば、全て片付くだろうと」

水島「うん」

藤「何故、そんなものを世代間でやるんだと。だけど、それは言えないんですよ。各政党は、やっぱり自分の票田が高齢者なもんですから。だから高齢者を、やっぱり味方に付けるような政策を打たない限りは、いくら会田さんがおっしゃった正論を言ったって届かないです」

水島「うん」

藤「だから政治家だったら、やっぱり半分、嘘でもいいから、国民の呑み込み易い様なものをオブラートに包まなきゃいけないんですけど、私は何度も言いますように、減税すれば多分、若い方は選択、将来あるし選択する可能性が高いので、それだけで豊かになります。

だけど、やっぱり、もう65を過ぎたら人生が終わってしまうという方からすると、選択の可能性が無い。減税して貰ったって貯金が増えるだけだという時に、何か少し税制上の制度で少し、この国が変わった例が無いかなあと思った時に、思いつくのは故郷納税ですよね」

水島「うん」

藤「実質的にはあれは減税ではないんですけど、要は、最初、自分の出身地で納税したいっていうことで始まってはいるんですけど、結果的には今、その見返りがあるから、実質的な減税になっていますよね。そういうものを、例えば、私は個人版として前も言いましたけど推し活減税」

水島「うん」

藤「推し活をやっている方の幸福度が今、高いって言われていますから、推し活減税的な、何となく高齢者になると、本当に社会の居場所がどんどん無くなっていくんですよ。居場所と言うか、もう出場所が無くなる」

水島「うん」

藤「そういうものを作って行って、色々『幸せの為の経済学』なんていうのを読むと、人間が幸せになる為の Wellbeing になる為の条件を考えると、まず働くこと。働くことが出来ません。二つ目が他人の為に役立つこと。三番目は共同体の中で尊重される事」

水島「そうだね」

藤「多分、そういう副次効果、まあ、基本的にはがめつい減税でいいと思うんですけど、副次的な効果も含めて高齢者の居場所とか出場所が出来るような形にして、高齢者もいいじゃないですか、減税しましょうよと。財政赤字なんか構いませんよと。そういうスピンをかけながらやって行かないと、やっぱり変わっていかないのかなあ、私は減税で日本は幸せになるかっていう時に、高齢者は貯金が増えるだけで多分、幸せにならないです

よ」

水島「うん…」

藤「それで、お金を使う場所もありませんと。もうちょっと近代経済学を前提とするピラミッド型じゃない、非常に歪な逆ピラミッド社会であるっていうことを考えながら、日本の政治家方は考えていかないといけないかなというのの一つです。

それから、最後にもう一つ外交面でお話すると、日本はトランプさんに対して中南米外交の手助けをしてあげたらいいと思うんですよ。彼らは今、中南米に相当、強権的とか砲艦外交をやろうとしていますけど、中南米に対する日本のソフトパワーは非常に高いですから。

そういう日本の中南米、かつて日本を介して A. S. E. A. N. とか東南アジアをアメリカに接近させましたけど、そういう形で中南米外交で日本が独自にもっているソフトパワーを使えばトランプさんに対して、かなりアピール出来るんじゃないか。まあ、それによって関税とか色んな面のものがオフセット出来るか判りませんが、そういう外交力も考えていったらいいんじゃないか。

さっき決め打ち外交っていう話がありましたけど、もうちょっと自分の頭で考えて自分の持っている資産を棚卸して、何がアメリカに使えるかっていうことを考えたらいんじゃないかなあと思いました。以上でございます」

水島「そうですね。団塊の世代の私なんかはそうだからね」

藤「うん」

水島「やっぱり、言うように、ある種の上場企業っていうか一流企業的なところへ勤めた人達は、まあ、それだけど、逆に、私は色んな人達に会ってみると、国民年金で暮らしている人達でね」

藤「うん、でしょうね」

水島「ひと月5万、6万とかね」

藤「うん」

水島「それで道路のガードマンみたいなのをやって…」

藤「そうですね」

水島「やれる人はやって、お金を稼いでいるけども、女房に死なれたとかいう、さっきも言っていた一人ぼっちでね、だから、こういう人達も実は多いんですよ。若い人達がね、さっき言ってくれたように、老人達がこんなに寂しい人生の最後を迎えているっていう人達も、実は多いっていうことを考えると、さっき、藤さんが言っていた共同体とか、みんなの中で役に立つとか生きているとかね、身体に合わせてね、体調というのもあるけど、やっぱり、やらなきゃいけないっていうので、前に徴老制って言ってたんですよ、ああいうのを（笑）」

藤「うん」

水島「徴兵制じゃなくてね」

藤「徴老制ですね」

水島「65歳以上になったら…」

藤「老人を挑発するんですね」

水島「年金、厚生年金を貰うことになったら、半年ぐらいは介護施設へ行って介護を手伝う。出来る人は出来る、まあ、身体によって違いますけど、そういう事をやると、自動的に自分もサービスを受けられるみたいなね。そういうようなことを、定年退職した人達はやっぱり強制的に、ある程度、人と関わるようなことをやらないと、日本人は独りぼっちじゃ、あまり生きられないと思う。グループとか仲間の中に居ると個性を発揮して色んな

事を元気に出来るっていうねえ。そういうのがあると思うので、さっき藤さんが言った、
こういうベースの点ね」

藤「うん」

水島「本当に、ああいうものを大事にしてね、何か出来ることを考えた方がいいと思います
すね。はい。有難うございます。これは逆に言いたかったことなんでね」

藤「はい」

水島「では田中さん、お願いします」

田中「まあ、具体的な政策については、今日、花粉症とか言いながら…」

水島「結構」

田中「ペラペラと」

水島「良かったよ」

藤「良かった。良かった」

田中「花粉をね、こうやって呼気で吹っ飛ばすと」

一同「(笑)」

田中「そういう形でやったら結構、良かったんですけど」

水島「ああ、今、いいよ、それ(笑)」

田中「まあ、藤さんが今、手元に持っている本っていうのは、一橋の学長だった蓼沼宏一
さんの本ですよ」

藤「ああ、そうです」

田中「蓼沼さんが学長だった時に福田徳三っていうね、当時、一橋大学は、東京商科大学
と言われていて、そこで一橋構内に行くと、一橋大学を創った経済学者としてモニュメン
トもあるんですけどね。彼の著作集の新版を蓼沼さんが学長の時に、僕は早稲田ですけど
ね、その研究者だったので入れてやりましたが、その本にも書かれている話に繋がって
いくかと思いますが、要するに市場っていうのは完全じゃないですよ。市場取り引き。ま
あ、市場原理主義的な発想っていうのは、簡単に言うと、そこに取り込められない、或
いは排除されている人、今日の話題で言えば、鈴木さんが…その本が凄く興味深いんです
けど、題名の闇、闇っていうのは正に市場から排除されている人達でもある訳ですよ。
つまり市場っていうのは正義の取引等とは違う様な闇バイトであるとか、或いは、まあ、
売春であるとかね、そういったところに自分で行っている人も居るかもしれないけど、多
くは行かざるを得ない人かもしれないと。

更に生活が非常に厳しい状態であるような国民年金もそうです、生活が出来ませんから、
事実上、生活保護に頼ってもおかしくないような高齢者が凄く増えているという人達も、
市場中心の経済で排除された人達ですよ。そういった市場外の人達を、いかに社会の中
で生存権が保てるような…」

水島「うんうん」

田中「しかもプライドを保てるような生活にもって行けるように経済全体を設計しなきゃ
いけないっていうのが、蓼沼さんとか先祖である福田徳三が言っていたことで、それは、
非常に今も大きいメッセージは持つと思うんですよ」

水島「うん、うん」

田中「正にそれをやらない限りは経済っていうものが、かなりな人数を不幸な状態にした
まま、一部の人の幸福しか追求できなくなってしまうというところで、本当の幸福は何か
と言うと、まあ、薄う〜く広く、みんなが何となく経済が上手くいっているんじゃないか
かなと思えるような環境にもって行くことが重要ですよ。

そこで安倍政権は結構、シルバー・デモクラシーは確かにそうだけど、当時、若い人達が

支持していましたよね。今と全然、違って、それによって長期政権が可能になった面って凄く強かったじゃないですか。

石破さんっていうのは田舎だとか地方だとかね、高齢者には結構、支持されていますけれども若い人には全然、駄目ですよ。全体も政権維持が出来ないような環境になっちゃっていると。やっぱり安倍政権の遺産を、もう一回、振り返るべきですよ」

水島「うん」

田中「積極財政は残念ながら出来なかったと。でも金融緩和は大胆にやったと。じゃあ、それを生かして大胆な金融緩和と、そして積極財政、安倍政権が出来なかったところで、減税政策ですよ。それに期待している若い人が多いから。そこで若い人の支持を取り戻せば、まあ、シルバー・デモクラシーにも期待しても駄目ですよ。高齢者、そんなに簡単にねえ、せいぜいお灸をすえる行動するぐらいで、お灸をすえないような隙を与えないで、尚且つ若い人の支持を取り戻せるか、つまり安倍政権の長期化。

それと同じ路線を是非、具体的な選択肢としては、客観的に見たら、僕もバイアスが入っちゃっていますけど、まあ、高市さんしか居ないですから。だから一刻も早く減税競争に加わって欲しい。そうしないと、本当に自民党は出口なしですよ。ということをお今日は言いたいです」

水島「はい。有難うございます。長尾さん、じゃあ、お願いします」

長尾「今のお話は、もう本当に心に響きました。うん。どの政権とは言いませんが、悪しき政権は、あくまでも一般論ですよ。まあ、さっき若者の無関心。無関心であって欲しい訳ですよ。ええ」

藤「そりゃそうだ」

長尾「無関心であって欲しい。そして、あいつが悪い、こいつが悪いって言って批判ばかりして欲しい。それで終わって欲しい」

藤「そうですね」

長尾「ええ。批判から何も生まれないっていうことは解かっているので、悪しき為政者は、そういう批判を受けたってへっちゃらですから」

水島「まあ、そりゃそうだね。戦後政権がそうですよ」

長尾「それで居てくれれば、それでいいと。やはり、これを、うち破らなきゃいけない。何をやらなきゃいけないかっていうことは、もう判っている訳ですよ。今日、この議論が実現すればいいということ。じゃあ、どう実現するかってところで、もがき苦しむ訳ですが、私は、あくまでも予定ですが今年の夏に選挙を予定していますが、私一人、戻ったって一人なんですよ。ええ。

今、もう多勢に無勢で、あちら側の勢力が大きいので同じような人達がいかに戻れるか。松田先生も含めて戻れるか。ええ。こういう現実を突きつけられていますよね。ええ。壁は相当、厚いので数が無いと打ち破れないと。もう引退された税調の重鎮で、私が護る会で消費税停止法案を作って説明に行った時に、じゃあ、10分だけ時間をとるよって言われて、何だかんだ50分も時間をくれて、その間、何を言われたかと言うと、長尾さん達が言っている事はよく解ると」

水島「うん」

長尾「よく解ると。その通りだって言うんですよ。本当にそう思っているか判りませんが、ただ、やっぱり優先順位が違うんだなって思ったのは、ここまで来たことを優先する訳ですね。例えば消費税についても消費税を導入するにあたって、我が党の色んな人がもう大変な血を流したと」

水島「ああ、そういうことあったねえ」

長尾「ええ。いや、そりゃそうでしょうと。ええ。だって、そもそもおかしい制度だから血も流れますよねって、そこまで言いましたよ。ええ。私は、やっぱり日本経済を駄目にしたのは色んなものがありますけれども、絶対的に消費税っていうのはあると、もう骨の髄まで、そう思っていますから。

ただ経済理論、みんな、我が国は、この減税で日本を幸せにすることが出来るかどうかっていうのは頭で解っていても、過去にずっと囚われちゃって、ここまで来たものを捨てきれないっていう、その勢力を、とにかく打ち崩す為には本当に数しかない。

あとは御旗が誰かっていう話ですよ。ええ。高市早苗さんしか今、居ないんだと、私もそう思っていますから。ですから日本をここまで戦後のボロボロの状態から引きあげて来たのも自民党だという自負はあるし、こんな日本にしてしまったのも自民党だと思っていますので、とにかく今日は本当に勉強になりました」

水島「はい」

長尾「ええ。ほんと、有難うございました」

水島「その通りですね。何とか、みんなでやれるといいということですけども、その通りだと思います。では、鈴木さん、お願いします」

鈴木「はい。長尾先生にも早く戻って戴いて頑張って戴きたいんですけど、そう思う理由の一つとして、もう日本には時間が無いと思います。人、物、金の観点で言うと、もう、この3つが全部、日本から出て行っている状況で。これは経済的にもそうかもしれませんけど、社会の状況から見ても、そういうことが起きて、やっぱり、まず、この人、物、金の人を言いますと、もう物理的に日本を捨てて、日本、日本人であることをやめて海外で永住しよう、まあ、海外で暮らそうという人がもう数十万人居る訳です」

水島「数十万人」

鈴木「50万人ぐらい居る訳ですよ」

水島「ああ」

鈴木「もう、それぐらいになってきている訳ですね」

水島「うん」

鈴木「この流れっていうのは多分、もっともっと続くと思うんですよ。投資家のジム・ロジャーズさんも40代は日本を捨てて海外に行った方がいいよ。日本はもう見込み無いからと」

水島「うん」

鈴木「そういう風に言っている訳ですね。まあ、そういうのを聞くと、もう、なんだ、こいつはと思うんですけども…」

水島「一理あると（笑）」

鈴木「まあ、ただ言いたいことは解りますよね（笑）。今の日本だと、若者を惹きつけるような、そういう国ではない。チャンスは日本じゃなくて世界にあるんだっていう考え方は解るんですよ」

水島「うん」

鈴木「今、もう、そういう状況になっていて、人、物、金の人でも出て行っています」

水島「うん」

鈴木「物と言えば、日本製品、昔は凄かったですよ。もう世界中で日本製品って、求められていた訳ですね。それが今じゃあ、日本製品って言っても、殆ど日本製品を欲しいっていう人は居ない訳ですよ。トヨタだって今、トヨタに乗りたいて人は、あまり居ないですよ。もう電気自動車を欲しい人ばかりですよ。そういう訳で、その物自体も日本から高度な物、世界が欲しがらる物っていうのは、もう日本には無いかもしれない」

水島「うん」

鈴木「無くなって来ているのかもしれない。あと、お金の観点で言っても、最近、政府は貯金から投資へって言うんで、そのNISAとか色々やっていますけども、それで日本人が何を買っているかって言うと、全米株式とか全世界株式とか、日本株じゃないですよ。アメリカ株とか世界株を買っている訳ですよ。要するに金も日本から出て行っている訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「まあ、それは、もしかしたら円安の一つの大きな要因になっているのかもしれないというぐらい日本から金が出ている訳ですよ」

水島「うん」

鈴木「要するに今の日本って人も物も金も全部、外に出て行っている訳ですよ。まあ、そういう国になっていて、はっきり言うと、日本人の日本離れが起きている訳です。今、もう現に目の前で。これは、もう30年、ずっと政治が上手く日本を成長させることが出来なかったっていう、そのツケが今、来ている訳ですよ。もう時間が無い訳ですよ。さっき、米の問題も出ましたけども、米だって、もう、こんなに高かったら、貧困層って値段で決めますから、じゃあ、いくら米を食べたいと思っても米が高かったら、米をやめて小麦にしよう。食パンにしようとか、そういう風になりますよね。そうすると日本人の日本食離れも当然、起きる訳ですよ」

水島「そうですね」

鈴木「だから、今、起きているのは、要するに日本人の日本離れっていう、そういう現状じゃないかなという風に思います。だから、これを一刻も早く転換して欲しいんですよ。それには、やっぱり長尾先生のような、ちゃんと経済を解っている人にちゃんと言って欲しいんですよ」

水島「うん」

鈴木「と思います。以上です」

水島「はい。日本離れて、私は小野田少尉をゲストに迎えて1時間ぐらい話したことがあります。彼がバルバング島から日本へ戻って来て、日本に戻ってきたつもりだったけども戦後日本に戻って来た」

藤「ああ。なるほどねえ」

水島「嫌になっちゃって、全部、政府から貰ったお金、見舞金とか義援金、靖国神社に1千万だったかな、寄付して、ブラジルへ行っちゃった。また戻られましたけど。少年の教育をしたいって言ってね。でも、今言ったように日本離れっていうのは、実は本当の意味での本来あった日本じゃなくて、今のこの戦後の日本。とんでもないね、というところがあるんじゃないかなという気がしますのでね。はい。そういう意味では参考にして、我々はそののこのところを見ておこなきゃ、貧しい人とか、そういう人達が底辺だからって言うんじゃないで、日本とかそういうものに絶望する社会とかそういうものを作って、他の国の所へ行きたいっていう風に思うのは、そののこのところが深刻ですよ。前も言ったように『滅びし者の面影』という渡辺恭二さんかな」

藤「うんうん」

水島「あれ、書いた人が書いている中で一番、印象に残っているのは、やっぱり、明治、あの人は外国人から見た日本というものを、ずう〜っと明治維新の江戸とその中で言ったのは、世界で一番、子供が可愛がられている国って、みんなが言っているんです」

藤「幕末ですよ」

水島「そう、幕末の。日本人は、こんなに明るくて好奇心が強い。外人が来るとわあ〜っ

て言って、役人に追われても、また、わあ～って笑いながら、また戻って来て本当に子供が可愛がられている。そんなに豊かじゃないけれども、これ、一番、幸せなところじゃないかなと。

そういうことを、ちゃんと長尾さんとか人の痛みも、よく解るひとだからね。そういう意味ではね、そういう思いを持った政治家がやっぱり出て貰いたい。このお二人はそういうのをお持ちになっていると思いますけどね。やっぱり、そこが無いんですよ。だから本当につまらない国という印象を持ちちゃうっていうねえ、国から何か愛を、愛って言うと変な言い方だけど、何か思いやりとか温かみのある人情というか、色々なものを受け取った覚えが無い子供達ばかりになっている。

それで爺さん、婆さんも豊かなお金持ちは別として、貧乏人の爺さん、婆さんは、本当によく耐えていますよ。能登半島に行った時、1月1日に地震があって6月末日にやっと、所謂、緊急住宅っていうのかな、あれに入った訳ですよ」

藤「仮設住宅ですか」

水島「うん、仮設住宅に。そのお婆ちゃん言っているのを聞いたら私は涙が出そうになったけど、いや、もう嬉しい。6月に何とか入れました。皆さんのお陰でと。ちょっと待てよと。俺から言うと、6か月も何をやってやがんだよ。ずうっと学校のああいうところに放り出していた訳ですよ。でも、そういうお爺ちゃん、お婆ちゃんは、それでも感謝してくれるっていうね。だから、そういうものに、ちゃんと応えられる政治がね、取り戻せないと日本じゃないですよという感じがしますけど。最後に会田さん、お願いします」

会田「はい。減税と積極財政は、日本に残されたチャンスだと考えています」

水島「そうですね」

会田「まあ、一つ目は国民生活を立て直すと。鈴木先生のご指摘された社会の闇を払拭する為に大事です」

水島「はい」

会田「もう一つは、貿易収支を重要視するトランプ政権の日本に対するリスクを、内需拡大で減じると。ある意味で、とても日本にとっては重要な政策だと思います。ただ、まあ、今回、国民民主党が求めている減税案は、よく言われるように粗い試算で、7～8兆の減収になると言って大きな障害になってしまったと。これは前半でも申しましたが、グローバルな普通の財政政策のやり方であれば、そのような裁量的政策に財源を求めるっていう事はやりませんので、別に7～8兆円、どうだっていう話ですが、じゃあ、実際にどれぐらい減収になるのかっていうのは、ちょっと計算してみますと、これ、税収がどうやって説明できるか税収の伸びを説明できるのかという推計で、当然、経済規模である名目GDPの成長率と、先程、ご説明をした企業と政府の支出する力であるネットの資金需要、まあ、これで大分、説明できる訳です。

そして注目なのが、一つ目は、この名目GDPのところにかかっている、この数字が2.82っていうことは、名目GDPが1%伸びると税収は2.8伸びると」

水島「そうだねえ」

会田「これ、よく言われる財務省は1.1とか1.2で渋い計算をしている、より税収は、伸びる。その分、財政には余裕があるということです。もう一つ面白いのは、ここに機械的に消費税率を入れてみたんですけども、これは、ケース、マイナスですね。消費税を上げると景気が悪くなって、税収が落ちるという計算になっていると、あまり、ここは、追求しませんけれども、まあ、ちょっと消費税を上げて景気を悪くして、自ら苦しめて、財政まで悪くしてという、あまり、いいことではない計算です。

とすると、今回、例えば粗い計算で7～8兆の減収がある、7.5兆の減収があるとします

と、まあ、今回は、これは年収の壁なので労働供給が増えると考えれば、同じだけの名目GDPが増えるとか企業と政府の支出する力も増えるはずなので、当然、戻って来る税収も増える訳です」

水島「そのはずだよ」

会田「そして、この計算でやりますと、今回、粗い計算でスタートが7.5兆円の減収だとしても、この名目GDPの拡大とネットの資金需要の拡大で、マクロの増収が4.6兆円あると。ということは、差し引き2.9兆円の減収でしかないということです」

水島「うん」

会田「2.9兆円って、どのぐらいの数字かって言いますと、昨年、岸田さんがやった計画減税が3兆円ぐらいなので、あの3兆円の減税を恒久化したのと同じぐらいでしかない訳ですよ」

水島「ああ～、じゃあ、いいじゃないですか」

会田「ですから普通に出来るはずだとは思いますが」

水島「そうですね。はい。はい、皆さん、どうも有難うございました。まあね、前向きの話で、このお二人の政治家を目指す方もね、本当に人の心っていうか人情が解る人達でね、これ、やっぱり本当に、ちょっと感情論で聞くようですけど、人の心に届く政治を、もう一回、取り戻して貰いたい、日本を取り戻すというのはそこだと思いますんでねえ、松田さんや長尾さんには本当に期待したいと思います。

これはねえ、党派を超えて、私は減税や積極財政の、問題を考えている人達を選んだ方がいいと思います。野党だから、そっちを選ぶとかね、与党だから選ぶというよりも、こっちの今の経済論で、国民を少し経済的に幸せに出来る人達を、人で選んで貰いたいと思いますね。

そういうことしか、今、もう、ないんじゃないかっていう気がします。因みに今日、出ませんでしたので一応、言っておきますと、よくディープステイトと言われるロスチャイルドの危機っていうのが報道され始めました。これは元MI6の中東特使顧問のシンクタンクの代表ですけどアラステア・クルークっていう男ですけども『シティ・オブ・ロンドンは米露の和解によって自分達が完全に排除されることを理解している。彼らは最早、新たに開かれる大陸経済圏にとって殆ど無関係な小さな島（イギリス）に過ぎなくなるだろう。そして彼らが長年、抱いて来た最大の恐れは最終的にドイツとまたロシアが正常化することだ』っていう指摘があつてね、まあ、どういう流れになるのか、これも情報機関の人間の話ですから何処まで本当か判りませんが、こういう流れの中で我々が在ること。

今迄、安心して来た戦後体制が、世界中で色々崩れ始めている。そういう中での、日本のこれから生きる生き方だと思います。今日は、皆さん、どうも有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****